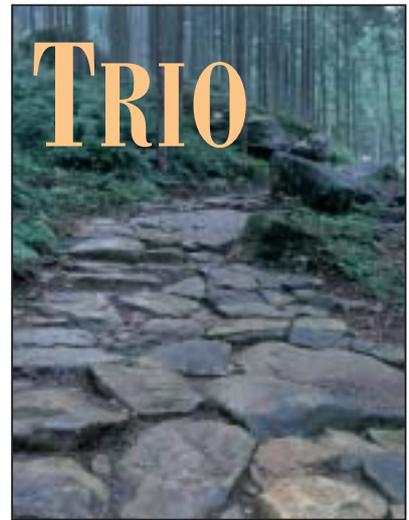


トリオ  
第5号



三重大学大学院人文社会科学部 地域交流誌

T R  
C O N T

I O  
三重の文化・社会・自然  
E N T S

**三重の歴史と風景**  
関西鉄道・津駅の開業  
西川 洋 .....29

**地域から海外へ～海の見える研究室～**  
服部 英世 .....30

**三重から世界へ 世界から三重へ**  
日本人とアメリカ人の類似点を求める  
グットマン・ティエリー .....32

**コラム**  
地域って頼りになるの？  
麻野 雅子 .....34

第18回三重大学人文学部公開講座  
児玉 克哉 .....35

**書評 黒川みどり『地域史のなかの部落問題』**  
尾西 康充 .....36

**雑感**  
洪 恵子 .....37

**巻頭言**  
山中 章 ..... 1

**鼎談 三重の街道を語る**  
小倉 肇×長嶋 真貴×安食 和宏 ..... 2

**特集 三重の街道**  
新街道風景づくりの胎動 環境と文化をつむぐ網の目型社会へ  
浅野 聡 ..... 8

初瀬街道沿いの城郭群 一戸木城籠城戦から—  
藤田 達生 .....11

齋宮の道  
榎村 寛之 .....13

関町関宿の町並み保存  
寺嶋 吉明 .....16

**特集 亀山市・関町の研究**  
「三重の文化と社会」報告会 .....18

亀山市の企業誘致とまちづくり  
肥田 幹子 .....19

河川NPO比較検討  
中原 栄子・平石 恵理 .....21

亀山老人保健施設にみる入所者家族の現状  
緑川 奈那 .....23

亀山・関地区の地域企業の企業戦略  
松本 陽介 .....24

中国との関係を強める亀山市の自動車関連企業—対中投資と研修生受け入れ  
王 宇谷 .....25

亀山宿助郷と幕末期の助郷一揆  
西濱 広亮 .....26

古墳時代後期の亀山・関  
山田 真靖 .....27

室町將軍の参宮と新所での饗応  
山内 宏之 .....28

## 巻頭言



大学院人文社会科学研究所 地域文化論専攻主任 山中 章

国際交流、地域貢献が叫ばれて久しい。全国の「国立大学」がまるで魅入られたように同じキャッチフレーズを掲げている。しかし大学はこれまで交流や貢献をやってこなかったのだろうか。私には近年の「貢献」や「交流」にこそ問題が潜んでいるように思える。

先日、中国陝西省西安市にある西北大学の文化祭で恥ずかしい事件が起こった。日本の留学生が破廉恥な踊りをして中国学生の鬨聲を買い、抗議の学生によって留学生寮が包囲され、無関係な学生が暴行を受けたというのである。日本のメディアにはタレントによって演じられる「裸」が氾濫している。十余年ぶりに優勝した某プロ野球球団のファンが裸になって川に飛び込むシーンをまるでショーであるかのように報道するマスコミ。そんな「文化」に慣らされた学生が、留学先の歴史、文化、慣習などを理解することなく行ったのが今回の事件ではなからうか。

西北大学は中国でも有数の大学で、特に考古学研究室は有名である。私の友人の多くがこの研究室を巣立っている。三重大学からも今秋初めて、同大学の語学院に留学した学生が一人いる。彼女も事件のとぼっちりを受けて1週間ほどホテルに隔離されていた。国際電話の向こうで不安を隠せない学生の気持ちを思うとたまらないものがあつた。幸い学生はしっかりと立ち直り、「あのまま帰ったのではおそらく生涯中国へは行きたくなくなるだろうし、いやな思いだけを残すことになるに違いない」と考えて現地で再び勉強に励んでいる。もちろん西北大学の考古学研究室の学生達は、日本から来た仲間が事件学生とは全く違うことを知ってくれている。

そもそも国際交流とは何だろう。私は自国の歴史、文化を熟知した上で他国のそれらを学び相互理解を深めることだと考えている。相互理解に十分な言葉を習得し、熱く両国の考古学事情を語り合う。これこそ留学の真の

姿だろうし、この中から内容のある交流が生まれると信じたい。今回の事件を「雨降って地固まる」にできればいいと思う。

実は三重大学考古学研究室は昨年初めて中国陝西省商州市に所在する東龍山漢墓の発掘調査を実施し、後漢時代の300余点の青銅製明器を発見するという貴重な成果を得た。先の学生はこの時の経験を下に卒論を書き、留学の道を探ったのである。私の研究にも新しい視点を与えてくれた。調査地は漢代の首都長安を防衛するための関所 - 武関が設けられた地域であった。日本で言えば大和を守るために配置された鈴鹿関に相当する土地だったのである。秦嶺山脈と鈴鹿山脈、丹江と鈴鹿川、為政者達の防御本能は国や時を超えてさほど変わらないことを実感した。その鈴鹿関の一角を占める亀山市で今年から『亀山市史』の編集に携わることになった。武関を守る地方行政官の墓・東龍山漢墓、鈴鹿関の重要性をいち早く伝えた人物の墓・井田川茶臼山古墳、国際交流を通じて得られた成果は思わぬ果実を地域へ返してくれることになった。日本考古学を研究し、海外の研究者との交流などほとんどなく、その必要性も大して感じていなかった私には、実に新鮮な刺激であった。

地域交流誌として、大学院の研究成果を示し、地域からも大学との連携の可能性を探る。こんな方向性で始まった『トリオ』も5号を迎えた。交流や貢献のための種蒔きを終えたところである。新芽が発芽する日もそう遠くはないと思っている。大学の教育研究は一朝一夕になせるものではない。じっくり育ててこそ実りは大きく、長持ちする。人文社会科学研究所はまさにその拠点である。今後さらに国際交流と地域貢献の核として自覚を持って行動していくつもりである。多方面からの応援を期待したい。

(やまなか あきら)

# 三重の街道を語る

小倉 肇×長嶋真貴×安食和宏

安食 三重大学人文学部の安食と申します。地理学を専門にしています。今日は三重県の街道について行政の立場から、もしくは地元で活動されているという立場から、自由に語っていただくということで集まりを企画しました。街道の魅力をそれぞれの立場から紹介していただいた上で、具体的なまちづくりや地域づくり活動とどうやって結びつけていくか、さらには街道に関する調査研究・実践活動などで大学との連携がどのようなかたちでできるだろうか、といったところを考えてみたいと思っております。

では、三重県の街道の一般的な魅力、何が面白いかという点について、県全体でお仕事をなさっているという立場から、三重県生活部の長嶋さんお願いします。

長嶋 県庁文化振興チームの長嶋と申します。私はこの歴史街道に関わって今年で六年になります。以前は伊賀県民局にいました、平成一〇年度の歴史街道フェスタを地域において携わったというところから、この事業に関わらせていただいています。

今はスピードの時代といわれていますが、街道の景観を楽しむ時には必ず歩くんですね。街道は歩くからこそ見えてくる、そういうものが一つは魅力なんじゃないかなと思っております。街道を散策しますと、道標、石仏、常夜灯、あるいはお地藏さんや石碑などに出会ってますね。また、古民家や町屋などを見てみると、風情があるなとか懐かしい気持ちになったりしますね。建物もちよっと見方を変えますと、瓦に恵比寿さんが乗っていたりとか、屋根瓦を波

に見立てて魚の上に恵比寿さんがサーフィンをしているように見えたりとか、細部にこだわっているところが見つかったりして、こういうところが一つの魅力に感じます。三雲の市場庄や亀山の宿場、あるいは美杉村の多気ですと、昔の宿場の屋号を復活させようということで、屋号を看板にしたり暖簾にして掛けたりして、町をデコレーションしているのも一つの魅力だと思います。

また、市町村ごとにマンホールの蓋のデザインが違っていて、こうしたことも町を歩くからこそ見えることでしょ。町を歩いていると、昔懐かしい金鳥のホウロウ看板やお地藏さんにお参りするおはあちゃんに出会ったりします。探そう探そうとするのではなく、歩いていてふと自然に風景の中に溶け込んで入っていくもの、これが街道を歩くことの一つの魅力だと思っています。

安食 長嶋さんは仕事柄、実際に三重県の街道を歩いている方と話をする機会があると思いますが、そうした人は街道のどのついつつところに魅力を感じているのでしょうか。

長嶋 歩かれている方は、地域の語り部さんや地元の人と触れ合いお話をしたりする、そういう時に何かほっとするようなところに魅力を感じられているところが多いと思います。熊野古道では、語り部さんの活躍が盛んですし。

安食 三重県にさまざまな街道がある中で、今一番注目されているのが熊野古道だと思んですが、小倉さんから熊

野古道の魅力を説明していただけますか。

小倉 紀伊長島町教育委員会の小倉と申します。熊野街道、熊野の地域の魅力ということですが、私どもの地域は閉鎖された社会であったという特徴が、来年に予定されている世界遺産の指定に繋がったのではないかと思ってますね。開発されていたら石の道は消えてしまっていたと思います。

私は世界遺産登録三県協議会の委員も務めています。熊野古道が世界遺産に候補として登録されるということは地元としては考えてなかったんですね。ですから向こうの方からやってきた世界遺産候補であって、むしろ受けた我々が驚いたという現状です。平成五、六年までは、熊野古道の良さなんて全然地元ではわかってなかったんですね。

それに気づいたのは、東紀州地域活性化事業推進協議会が平成六年に結成された時に、東紀州八市町村が一つになって何か事業をしなければいけないということで、その時に共通してあたるものといえば古道があるじゃないかとひよっしたら何がこれが観光資源になるかもしれない、東紀州八市町村が共通した意識をもつ素材になるかもしれないということ、活性化協議会が取り上げたんですね。熊野古道検討委員会を作って、各町村から関心のある人に集まっていたら、初めて組織的に東紀州地域の熊野古道を調べるといことを始めたんです。そうすると案外の結果になったんですね。残っているところを歩いてみると、昔の人たちがこの熊野になぜ集まってきたのかということもおぼろげながらわかるような、精神が開放されるような雰囲気のある道であるということがわかってきました。

安食 古道の良さが見直されたというのは、東紀州体験フェスタというイベントの効果も大きかったんでしょうか。

小倉 熊野古道を見直すという機運が出てきた時に、東紀州体験フェスタが開かれたんですね。それと上手く合致して、県内の人たちに東紀州にもう少し注目して来てもらおうと、それにはこの熊野古道を歩いてもらおうという事業が非常に理にかなっているということを取り組みましたんですね。

ところが、地域の人たちがそれまで無視していたこの道に、地域の人たちも驚くほど新鮮な発見があったわけですね。自然的な景観もそうだし、起伏のある石畳の道を歩くことよって自然との一体感が得られるわけですね。これがひよっとしたら東紀州を再生する一つの材料になるかもしれないという期待が沸いた時に、平成二年でしたか、世界遺産の候補地になったというニュースが寝耳に水のようになかつたで飛び込んで来たんですね。ですから、私も文化遺産であるということについては、自分たちが良さを発見したのではなく、フェスタに集まって来ていただいた人たちと一緒に歩いたことよって再認識させてもらったと思っております。温泉とか、見たり食べたりするものなど何もないのに、ただ自然の中を歩くということだけで、この道のもつ魅力を再認識させてくれたのが一番大きいと



おぐら  
◎小倉

はむら  
肇

1935年 三重県紀伊長島町生まれ。  
三重大学学芸学部卒業  
紀伊長島町教育長  
みえ熊野学研究会運営委員長

思います。今のストレスの多い社会の中にあつては、歩くことよって何か開放感を得ることができる、自然との一体感がもてるところに一番熊野古道の魅力があると思えますね。

熊野古道の良さは自然との帰一性、精神の開放感みたいなものが得られるところにあるのだと思っております。

安食 平成一年に東紀州体験フェスタが開催された時は、熊野古道訪問者が年間一四万人で、その後少し減りましたが、最新の資料で約九万人です。昔はほとんど来なかつたのに、今ではこれだけ人がやってくるというのは、やはり引きつけるものがあるんだと思います。

小倉さんの話では熊野古道の魅力というのは、自然との一体感にあるという点を強調されてきましたけれども、あの道が作られてずっと使われてきたという歴史文化的な側面も当然あるわけです。ただなかなかその点まではあまり理解されていないと感じるんですが、どうでしょうか。

小倉 先生がおっしゃつたように、熊野古道はフェスタ前にはおそろく年間一万人も歩かなかつたと思つたんですね。私もその地方は大正初期まではあの道しかなかつた。ですから石の道を国道として使つていたんですね。それから大正六、七年に熊野街道の大改修があつてはじめてトンネルが抜けるんですよ。そういう点では、それまでずっと使つていて急速に使わなくなつて七、八〇年眠つていたということですので、何百年も放つてあつた道ということではなかつたということが、再度見直された時にかなりのところが通れる状態で残つてあつたという理由だと思つていただけます。

安食 熊野古道を語る時は「巡礼の道」「参詣道」という言葉がよく使われますね。

小倉 肇 × 長嶋真貴 × 安食和宏

◎鼎談◎

小倉 熊野古道は生活の道でもあつたんですけども、三重県の中でも孤立したところですから、この道を通るよその人というのは、巡礼とか、あるいは講などの宗教的な理由で通る人が多かつたと思つたんですね。ですから地元の人にもこの道は生活の道であるというのと同時に、巡礼たちが行き来する道であるという意識があつたものですから、道に対する独特の愛着や誇りがあるんですね。昔から道普請は伝統的に丁寧に行われ、今でもその名残は残つています。今度こういつかたちで古道が復活した時に、紀伊長島町でいいますと志子地区とか三浦地区で多くの人が出て、ボランティアのかたちで道を修理して人を案内するということ、割とよそと比べるとできたというのはそういう伝統があつたんだと思つた。それから巡礼たちが病気になるたりした時も看病してきたし、亡くなつた時は丁寧に葬つた巡礼墓というものがほとんどの集落にまだ残つています。そういう道に対する伝統的な考え方というものは確かに他の地域にはないものがあると思つた。

安食 三重県全体を見ますと、昔の大動脈の東海道があり、伊勢街道という伊勢神宮に至る独特の道もあり、それとはまた違う宗教的な熊野方面の道などいろいろあり、それぞれ独自性を持った街道がまとめて見られるのは全国的にも珍しいのではないかと思います。

次に、街道と地域づくりについて考えてみたいと思つた。ここ一〇年ぐらいの間に、の道といったものがたくさん出てきました。これは、バブルの時代が終わつた後に、身近な地域資源を見直そうというのが強調されるようになったという側面があると思つた。もう一つは、特に中高年の方々のウォーキングが非常に増えてきたという時代的な背景もあるかと思つたんですけども、そういう中で三重県は平成七年度に歴史街道構想を提唱し、具体的な活動計画を発表してきましたが、そのあたりの事情の説明を長嶋さんからお願ひできますか。

長嶋 まず、みえ歴史街道を作る会の経緯からお話しさせていただきますと、一九八八年三月に松下幸之助さんを座長に、堺屋太一さんらをメンバーとして、世界を考える京都座会というのが開催され、その中で歴史街道というのが初めて提唱されました。当時は、外国の方々に「日本について何を知っていますか」と尋ねると、「商品の名前であるとか企業の名前が返ってきたそうです。そういうことがちょっと寂しいことじゃないんだろつか」ということと、日本人は高度成長期の時代からずっと物質的な豊かさを求めてきたので、日本人の根底にある伝統や文化というものを改めて見直そうということ、伊勢を出発点にして飛鳥、奈良、京都、大阪、神戸と、日本の歴史を古代から中世、近世、近代というように一筆書きで辿るルートを作るといったことで歴史街道が提唱されました。そういうお話があったら三重県では平成八年にみえ歴史街道構想を策定しました。

安食 その内容はどついつい具合にまとめられるのでしょうか。

長嶋 三重県には伊勢神宮があるということもあって、三重県の街道を、伊勢参宮等で旅人が行きかった道として考えて、その魅力を、歴史性、先人の知恵や技、ぬくもりとか自然景観、祭りや伝統行事など六つのテーマのもと、二一世紀の地域づくりの資源として注目しました。そこで平成八年に歴史街道構想が策定されたということです。歴史街道構想は、地域がそれぞれ相互に協力して住み続けたい町をつくり、その結果、地域外との交流が生まれる地域と、いうことを目指しておりまして、行ってみたい地域づくり、街道の魅力を通して交流の生まれる地域づくり、地域間の共創という三つの目標を作りました。そこでキックオフイベントとして、平成一〇年一〇月一〇日から歴史街道フェスタを開催したということになります。

歴史街道フェスタ以降は東紀州地域を除く七つの生活創造圏で、歴史街道を活かした地域別の推進計画というものを作ってきました。東紀州では平成八年に熊野古道整備計画というものができておりましたのでそれも含め、今現在

ではすべての地域で地域別の計画ができています。それに基づいてガイドマップ等の冊子を作ったりとか、ウォーキングイベントをしたり、地元の人たちに地域の街道の良さを知ってもらおう、例えば一緒に調べたり企画する過程で、自分たちの町の魅力に気づいてもらおうといったような形で取り組みをしているという状況です。

安食 地域別の推進計画というのはどついついところを目指しているんですか。

長嶋 それぞれの街道、あるいは地域によって成り立ちとか歴史性という魅力が違っていて、例えば四日市の地域別計画というのを見ると、先人、地域の文学史の偉人にスポットを当てて、それをまちづくりの材料にしているとか、伊賀ですと大和街道、初瀬街道、伊賀街道、この三つの街道そのものに焦点を当てて、お宝の風景ということと地域の魅力を発見されているというようなかたちです。津ですと、ウォーキングという一つの健康ブームもあって、地元の人たちに町を歩いてもらって新しい発見をしてもらおうというように、それぞれの地域の良さを使って推進されています。

安食 三重県の中でそうした取り組みが進んでいる地域はどこでしょうか。

長嶋 一番進んでいますのが東紀州地域ですね。世界遺産の登録もあって取り組みが進んでいます。あとは松阪の地域ですね。かなり取り組みが盛んです。あいの会「松坂」などの団体を中心として、生活創造圏ビジョンを作るにあたって、まちづくりの団体が新たに組織されたり、また組織されていたものが上手く繋がり、各団体活動が歴史街道の取り組みの一つとして行われたりというふうなこともあり、松阪の地域というのはかなり進んでいます。やはりそれ以前からまちづくりの気運が高い土壌であったということも理由であると思います。



ながしま まさき  
◎長嶋 真貴

1972年 三重県亀山市生まれ。  
1995年 三重大学教育学部卒業  
1997年 三重県伊賀県民局  
2000年 三重県生活部

安食 今お聞きしてなるほどなと思ったのは、基本は行政が大枠を作って進めていくということなんですけれども、実際の活動では市民グループの方たちが活躍されているんですね。

長嶋 そうですね。行政がどこまで関与するかという点について、あまり行政が手助けしてしまうとまちの活動が上手く育たないので、ジレンマというのがあります。まちづくりを進めていくためには地域の盛り上がりであるとか気運が大切であるということがよく言われています。その気運を盛り上げていくために、地域ごとでウォーキングを開催したり、ガイドマップなどの冊子を作ったりして地域の良さを知ってもらおうとさまざまなしかけを実施しているのですが、行政が関わることで果たして上手くまちづくりの気運

が盛り上がり、活動が育っているかどうか常に考える必要があると思います。

安食 熊野古道について見てみますと、いよいよ世界遺産登録というのを現実に考えなくてはいけないという段階ですが、小倉さんは熊野古道を今後どういう具合に活用して、まちづくりを進めていくとお考えでしょうか。

小倉 熊野古道を地域づくりの核にしていくということが果たして可能かどうか、簡単には言い切れないと思います。熊野はよそと比べて古道を活かす構想は上手く進んでいるのではないかとおっしゃいますけれども、熊野はそれしかないんですよ。しかし、これだけで地域の活性化を生み出せるとは誰も考えていない。熊野の特徴はやはり、昔から



あじき かずひろ  
◎安食 和宏

1962年 山形県生まれ。  
1991年 三重大学人文学部講師、93年より助教授。  
人文地理学が専門。

過疎であり今も過疎であるという事です。

熊野というのは、『古事記』『日本書紀』では日本の歴史の最初に出てきて、それからすぐ姿を消してしまっただけ。そこには人類が発生した段階で一番元になったものがずつと色濃く残っておいて、そのことが母なる国であると言われる原因にもなっている。それから熊野各地に祀られている神様自体が伊勢とは違っています。祀つてある神自体が反乱者の神であるということも風土に大きな関わりがあると思います。そういう地域であるからこそ、神話の時代を除くと、絶えず辺境としておかれ続けてきた。だから私も世界遺産指定というものを地域を再生する最後のチャンスだととらえて、これを何とか地域の人の努力で生かしていくという気持ちになっております。

ただ、これだけではやはりだめで、古道に対する現代人の価値観を活用すると同時に、漁業・林業・農業などの第一次産業とタイアップしていくという努力と一緒にやらなかったら、地域の再生には繋がらないと思っています。

安食 熊野古道の場合は文化遺産として世界遺産に登録されるわけですから、地域の文化というものも無視できないと思います。

小倉 熊野には暮らしの中に伝承とか風習そのものが残っているんですね。お祭りとかお盆の行事とかですね。先祖の霊を迎え、それを送るための熊野の花火や、紀伊長島の灯笼祭などです。祭礼でも神話に結びつく花の窟のお綱掛け神事などが残っています。そのような中で価値あるものは今後も残していかなければなりませんし、よそから来た人にそれを見てもらい、体験できるということを地域の魅力にしていきたいと思っています。

しかし、昔からのものを残しておくというだけではだめだと思っただけ。そこに住んでいる人間が住みやすくなければ持続はできないと思います。熊野古道も世界遺産に

鼎

指定されたからといって、指定されたところの木を一本も切つてはいけないというのではやはり長続きしないし、人間が生きていく環境としても望ましくないと思っただけです。林業家は周囲の環境に気を配りつつやはり林業をそこで営んでいくことが大切であり、保護条例を最大限尊重して条例の許す範囲で営業を続けていくという、その日常の営みを環境を壊さない限り続けていくということも大事にしなければならぬんです。保存ということと裏腹になるかわかりませんが、そういうことも一つ気をつける必要があるのではないかと思います。

安食 道とか街道は一つの資源であるけれども必ずしも金儲けになるかどうか難しいところがあります。それから、街道や街並みを見せる、交流するという場合に、住んでいる人の生活そのものを見せることになるので、ある意味では難しいんですが、例えば東海道の関の街並みが高く評価されるのは、そこに人が住んでいるからで、作り物ではない生活の現場なので、それが面白いのでないかと私は思っております。街道というものをいかに活用するかという場合にはそうした視点が基本の一つじゃないかという気がいたします。

そうした目で見ますと、これは街道よりも個別の建物の話ですが、例えばまちかど博物館を最近県が大々的に取り上げるようになったというのはどういふいきさつがあったのでしょうか。

長嶋 今では全国各地で地域まるごとミュージアムのような取り組みはあるのですが、まちかど博物館を作る際の全体構想としては、それも含めて既存の公立博物館とか資料館とか、そういったものを三重県全体でネットワーク化したり、あるいは街並みをエコミュージアムみないなものとしてとらえて、三重県をまるごと博物館として取り上げていくという動きがあり、その中でまちかど博物館という

小倉 肇×長嶋真貴×安食和宏

◎鼎談◎

TRIO SPECIAL

ものに注目したというところなんです。

まちかど博物館については三重県の取り組みが行われる前に伊勢のNPOが独自で取り組んでいました。それをモデルとして伊賀地域で平成一一、一二年ころ一番最初に九一館設立させていただきました。伊賀で始めた時は広域でのまちかど博物館というものは全国でもやられていなかった。それ以前のまちかど博物館というと、商店街であったりとか、町の一角ですね、東京の墨田区であるとか、大阪の平野区であるとか、商店街の活性化の一環として商店に昔からあるお宝を展示したり、自分の持っているコレクションを展示したりということを取り組まれていることが多かったのです。



伊勢街道 (伊勢市)

安食 こうした取り組みは全国的にも珍しいということですが。

長嶋 ええ、伊賀の七市町村をまたいで広域的にやったというのが初めてのことでした。まちかど博物館の中身としては、自分たちが持っているミニカーなどのコレクションを展示したり、あるいは自分が見せることのできる手仕事みたいなもの、例えばつる細工であったりとか、瓢箪を育ててそれを加工してランプを作ったりとか、機織りを見せたりとか、あるいはお店ですと、代々伝わっている看板とか、造り酒屋さんでしたら酒を作る工程を見せるとか、それぞれいろいろな魅力を展示物として公開して博物館にしています。

安食 私は三重大学の授業で、毎年津市を一日かけて歩くという実習をやっているんですが、例えば一身田の高田本山専修寺あたりに行くと、街道沿いで何が観察できるか、まちかど博物館のような建物からどういう歴史的なものを読み取れるかという内容ですが、学生はおおむね面白がっていますね。だから若い世代にも案外そういうのが好意的に受け取られるということを実感として私は持っています。

大学の話も出ましたので、それぞれのお立場から見た場合に、大学との連携という点はいかがでしょうか。大学はもつといる使い道があるのではないかと、場合によっては協同して何かをやるとか、そういう可能性はまだまだありそうな気はするんですが、三重大学の先生にはもつとよつとこつというところを期待したいというお話がありましたら、小倉さんいかがですか。

小倉 おおいに期待したいところなんです。去年紀伊長島町で初めて三重大学人文学部の先生方の自主的な講座を開いていただきましたが、堅い講座ですから毎回二〇人も集まったらいいだろうと思っていたところ、ずいぶんたくさん来てくれたんですよ。平均して一講座三〇人以上来ま

たね。地元の人たちも大学の先生と触れ合うことの魅力がわかったと思うんです。これからはこちらからもいろいろな点で三重大学との共催をしていこうと考えています。

確かに今まで三重大学はあまりこういうことをしなかったと思います。例えば長島の漁民の調査とか民俗調査とかを三重大学が泊り込みでやったというのはあまりなかったです。そういう点では民俗調査なんかも来ていただければこちらまでできるだけ援助はしていきたいと思っています。

安食 最初におっしゃったのは人文学部のフォーラムですね。もう一つ、みえ熊野学研究会が三年ほど前に作られて、毎年本を出版されていますね。三重大学の先生は一部個人的には関わっていると思いますが、もう少し工夫できる点もあるかと思うんですが、そのあたりいかがですか。

小倉 そうですね。みえ熊野学というのは、東紀州の地域の歴史とか民俗とか文学とか地理とか産業、動植物等の分野について、学問的な立場から地域の在住者が中心になって専門的に研究していった、その成果を町おこしとか地域の活性化に結びつけたいということから発足したんですけども、その時に地域の者だけではどうしても成果が偏ってしまうし見方が限られてくるので、必ず毎回基本的なところで大学とか研究所の専門家の論文も入れていこうということになっておるんですね。

今まで最初は古い旅行記、二点目は民俗学、それから三点目が去年出した熊野の植物や動物というようにテーマを決めて出版してきたんですけども、今年は今度も一度道を見直そうということ、田丸から熊野三山までの道を一度通してやっていこうということになっていきます。こういったことについては是非、三重大学をはじめとした県内の大学関係の先生方にも御指導や御協力をいただきたいと思っています。

安食 長嶋さんにもお聞きしたいんですが、私たち大学の人間が県庁の仕事に関わるとした場合、審議会や委員というかたちでは時々ありますけれども、報告書を一つ作っておしまいというだけでなく、もう少し工夫できるのではないかと常日頃から私は思っているんですが、生活部の今のお仕事を通して大学との関わりで感じているところなどをお願いします。

長嶋 確かに今までの行政というと、自分たちの行政の政策策定であるとか推進をするために専門家の方や大学の先生方にアドバイスをもらったりとか、各種委員会とか検討会というものを設けた時に有識者というかたちで参加していただいたりということが多かったんですね。

「二〇一三年ぐらいから県と高等教育機関との共同研究というかたちで大学の先生の方と県職員が一つのチームになって、県庁内からそれぞれの行政の課題というのを見つけてそれをテーマに一年間研究していくというような事業をしておりまして、私も歴史街道に関して、いかにしてソフト事業とハード事業をセットにしてまちづくりをしていくだろうかということテーマに工学部の方と一緒に研究し始めています。歴史街道のまちづくりについては、都市計画や建築の視点も必要ですし、歴史的な視点も必要ですし、あるいはもっと広いまちづくり、地域づくりのネットワークというの、社会学的視点から考えるとまた違ったものが見えてくるのではないかと、研究に対する期待もあります。

専門家の方と一緒にやってチームを組んでやっていく上で、行政職員が学ばなければならないこともたくさんあるし、研究をきっかけとしてチーム内の交流も出てくるということで、今後こういう作業を通じてさまざまな事業展開が考えられるんじゃないかなと思っています。さらに重要になってくると思います。

安食 街道に関する共同研究ならば、少し前例もあります。工学部の建築・計画系、もしくは芸術系が関わりますし、街道文化というのは非常に広いですから、文学、歴史、地理もありますし、案外いろいろなるから取り組むことはできるのではないかと思います。三重大学は学部が五つある総合大学ですから、多様な取り組みができるのではないのでしょうか。やはりそういうのをもっと意識しているような専門分野の人と連携しながら、地元と直接繋がる方法が考えられると思います。

それからもう一点言っておかなければならないのは学生ですね。三重大学の学生はおよそ七千人いますが、そういう学生を地域に連れて行って皆で集中して何かやるのかという可能性が考えられてもいいでしょう。

小倉 灯籠祭という紀伊長島町で大きな灯籠を海に浮かべる行事がありますが、この灯籠はボランティアで作りますので、町民の年齢が上ってきてなかなか数がそろわないんですね。今年は学生参加を呼びかけたところ、県外の芸術系大学など六、七校の参加があった。今後は三重大学をはじめ県下の大学にも呼びかけたいですね。地域の伝統行事への参加も大学生が可能なものについては地元大学にもこれから働きかけていきたいと思っています。若い学生がそういう行事に参加してくれることによって活性化するんですね。そういう点でも、連携していきたいですね。

安食 三重県独自の色々な歴史的・文化的な背景をもっている街道というのは、やはり活用できるところは活用すべきではないかと思えます。歴史街道には人々の生活が具体化されていますから、それを生かしながら地域・行政・大学が連携して取り組んでいくことが必要ではないでしょうか。

熊野古道の場合も、世界遺産登録というのは非常に重要なことでありますが、その基盤には人々の生活があるわけですから、上手く共存させていくことが重要になってくると思います。

「二〇一三年九月二十五日 アスト津」



熊野古道・馬越峠(海山町)

## 三重の街道

# 新街道風景づくりの胎動

## 環境と文化をつむぐ網の目型社会へ

浅野 聡

### 序 ヒラミッド型社会から網の目型社会へ

二〇世紀社会においては、国土計画としての全国総合開発計画に代表されるように、中央政府主導のもとに国土から地域へとトップダウン的に決定する計画手法が採用されてきました。いわゆる「大きな物語」から「小さな物語」を構成する方法論です。

たしかに高度経済成長期の社会状況に鑑みれば、成長する都市の時代に多大な社会資本整備が求められる中で、中央政府が強いリーダーシップを発揮して、物的には戦前とは比較にならないほど豊かで安定した生活環境をつくりあげたのは事実です。

しかしその一方で、全体性・画一性・経済性などを重視した国づくりは、各地域の長年の歴史と風土の中で育まれてきた個性的な生活の環境と文化を消失させると共に、地域社会による自立した地域づくり（自治）を遅らせ、結果として日本の風景の画一化や無個性化、地域づくり体制の中央集権化に拍車をかけてきてしまいました。今、新しい国づくりの在り方が模索されていますが、二一世紀社会が目指すべき社会像を簡潔に述べるならば、東京を中心としたヒラミッド型社会を解体して、多様な地域や主体が主権を持つ地域主権型社会を築くこと、といえるでしょう。そして、この地域主権型社会においては、各地域の個性的な

環境と文化が再評価され、その特徴が互いに網の目のように絡みながら地域を織っていくことが期待されます。やがてはその動きが地域を越え、網の目状にネットワークして国をカバーすることでしょう。この状況をヒラミッド型社会に比して表現するならば、網の目型社会（注1・2）と呼ぶことも出来るのではないのでしょうか。

### 1. 三重県の県土構造―街道文化の網の目型社会

日本の現代都市の多くは、近世の城下町・宿場町・門前町などを基盤にして発展してきています。三重県においても、伊勢市は門前町（鳥居前町）として、桑名市、亀山市、鈴鹿市、津市、久居市、松阪市、玉城町、鳥羽市、上野市、名張市などは城下町（あるいは陣屋町）として発展し、現在においても各地域の拠点的な都市として存在しています。

また都市のみならず、近世においては各地の城下町等をつなぐ街道が数多く整備され、それらもまた網の目状にネットワークされています。

江戸時代は、徒歩を前提とした街道による交通の最盛期であり、特に江戸幕府の主要な政策であった参勤交代の

制度は、街道整備にも大きな影響を与えました。参勤交代は莫大な費用を要するため諸藩にとっては経済的負担が大きかったのですが、その費用が宿場町などに落ちるため、沿道に繁栄をもたらすことになりました。そして江戸を中心とした全国規模の街道網の改善を促すこととなり、人の移動、物資の輸送、情報と文化の交流などを円滑に行うことが可能になったのです。まさに街道を通じて、各地の環境と文化が網の目のように交流していったのです。

三重県には、東海道を始めとして伊勢街道、伊勢別街道、伊賀街道、初瀬街道、大和街道、和歌山街道、熊野街道などの多数の街道が存在しています。全体的に見ると東海道に交差するものと、伊勢街道に交差するものとの2つに大別出来ます。特に伊勢街道に交差するものが多く、多くの街道が伊勢神宮を目指してつながっている様子から、三重県における伊勢神宮の重要性にあらためて気づかれます。またそのネットワークの構造は、伊勢街道を南北軸とし、それを起終点として京都・奈良・和歌山方面へと抜ける複数の東西方向の街道が交差していることが特徴的です。



三重県の歴史街道の一覧  
(出典：『伊勢街道。建設省中部地方建設局三重工事事務所』)

## 2. 近代以降の街道の変容

現代都市の多くが近世の城下町などを基盤として発展してきており、まさに歴史都市といってもよいことは前述した通りです。例えば城下町を基盤として発展した都市は、まちの中心部にいけば必ず城郭があり、周辺には武家地、町人地、寺社地が残り、文化財に指定されている史跡や建造物などもあります。近現代化のプロセスの中で、特に戦後の戦災復興事業や高度経済成長期の開発によってその歴史的景観は

変容しましたが、上野市や松阪市のように城下町としての名残を比較的よくとどめている都市もあります。

それは、街道は近現代化の中でどのようになっていったのでしょうか。結論からいって、全体的に見ると道筋としては比較的良好に継承されています。伊勢市、桑名市、松阪市、上野市、名張市などといった歴史都市を歩くと、意外にも道筋は残されているところが多いのです。

しかしまちを実際に歩いてみると、歴史的な雰囲気や風情は十分に感じら

れないところが多いのも事実です。その理由は、道筋は継承されていても沿道の町並みが変容し、すでに現代的な景観になっているところが多いためです。特に伝統的な町屋などが姿を消し、現代的な建築物に変わっていったことが景観に大きな影響を与えてきています。また街道の中の特定の場所は、近現代化の中で街道が拡張されたり、あるいは地区全体が更新される中で姿を消していくこととなりました。

## 3. 街道の道筋の継承と変容の要因

それでは、なぜ道筋は比較的よく継承されてきたのでしょうか。最大の理由は、すでに街道沿いに多くの町並みや集落が形成され人々の生活の場になっていたため、多数の人々や建築物を移動して道筋を大幅に拡張したりあるいは新設したりすることは、困難だったためです。

そこで、既存の町並みや集落をさけて、自動車交通に対応した新しい道路を新設するケースが多く、街道の道筋も町並みと共に残ることとなったのです。

三重県の道路を見ると、街道と並行して新しい道路が新設されている様子がよくわかります。例えば、東海道に対しては国道1号線、伊勢街道に対し

ては国道23号線というように街道に対してほぼ並行に新しい国道や県道が整備されてきています。東海道沿いの宿場町の1つであり国によって重要伝統的建造物群保存地区(注3)に選定されている関町の関宿を歩くと、国道1号線が関宿の町並みを避けて新設され、そのため町並みと東海道の道筋がセツトで残されていることがわかります。同様に伊勢市の伊勢神宮(内宮)の鳥居前町の内宮おはらい町を歩いても、まち中には伊勢街道の道筋がよく残され、国道23号線がおはらい町をさけて新設されていることがわかります。

しかし一方で、特定の場所においては、街道は大きく拡張されたりあるいは消失させられることを余儀なくされてきました。例えば、既存の町並みや集落の以外の場所においては、街道の道筋を一部踏襲して道路が新設されて街道が拡張されたこと、街道が河川を越える場合は、橋梁の移動・新設などに伴い街道が消失したこと、河川沿いに街道が存在する場合は、河川改修によってあるいは河川改修と道路新設・改良が組み合わさって街道が消失あるいは拡張されたこと、農村部においては圃場整備によって街道が消失したこと、桑名市・四日市市・津市・伊勢市における戦災復興事業の際に、街区が区画整理されて街道が消失

したことで、広幅員道路あるいは鉄道が街道を横断するように新設されて分断・消失したこと、などが上げられます。(注4)多くの場合、私たちにとって必要な道路・河川・鉄道・街区・農地などの社会資本を整備する中で、街道は変容あるいは消失させられてきたのです。

#### 4. 新街道風景づくりの胎動

冒頭で述べた通り、二世紀に入り、各地域の個性的な環境と文化を再評価し、その特徴を活かしながら地域づくりを進める時代を迎え始めました。このような状況の中で街道も注目され、その歴史文化をひもときながら地域づくりに活かそうとする動きも徐々に盛んになってきました。

三重県でも、「みえ歴史街道構想むすびのくにづくり」(一九九六年)が策定されたり、「歴史街道フェスタ」(一九九八年)が開催されたり、あるいは市町村や市民団体が中心となって様々なイベントが開催されたりと、盛んになりつつあります。

ただし、全体的に見ればまだ限定的な取り組みであり、街道と町並みや集落をセットで捉え、その地区が持つ環境と文化をハード・ソフト両面に渡っ

て保全・整備・活用しようとする事例は、きわめて少ないのが実情です。街道の道筋は残されても沿道の景観が地域の歴史文化と関係なく変容し、その結果、まちの風情が失われる状況は現在もあまり変わっていないのです。

街道の歴史的環境を総合的に整備する事例は少なく、特に市町村の条例によって景観保全地区を指定し、その効果が上がっているまちは、前述の閑宿と内宮おほらい町程度です。なお二見町や上野市においても、近年、景観条例が制定されて動き始めました。

また、現在大きな注目を浴びている事例としては、何とんでも熊野古道が上げられるでしょう。すでに重要な道筋は国の文化財に指定されており、近いうちに世界遺産に登録されること期待されています。

このような動き始めた取り組みに学びながら、新街道風景づくりとも呼ぶべき、新しい街道づくりを展開出来るかが、私たちに問われているといえるでしょう。二〇世紀の取り組みの反省を踏まえて、まずこれ以上街道を壊さないように気をつけていくこと。そして道筋だけではなく、沿道の町並みや集落も一体的に捉え、その地区の環境と文化をハード・ソフト両面にわたって保全・整備・活用しよう



東海道と閑宿の町並み(閑町)

試みていくこと。

すぐには前進しないかもしれませんが、「まちづくりは百年の計」の教えに従って、あせらずじっくりとそして着実に前に進めていきたいものです。

街道の魅力を知るには、なんとと言っても「書を捨てまちに出よ」を実践するのが一番です。三重県に残されている数多くの街道を訪ね歩き、その文化に触れると共に動き始めた街道づくりに多くの市民が参加することが望まれています。

工学部助教授・都市計画・都市設計  
あさの さとし



伊勢街道と内宮おほらい町の町並み(伊勢市)

#### 注釈

- (1)早稲田大学21世紀グループ 吉坂隆正・宇野政雄編：『ピラミッドから網の目へ 二十一世紀の日本=下』、紀伊国屋書店、1972年
- (2)基調提言研究会：『網の目世紀の胎動』早稲田大学まちづくりシンポジウム2003講演資料集、pp.1-46、2003年7月
- (3)文化財保護法と都市計画法にもとづいて指定される町並み保全地区のこと。
- (4)浅野聡・鎌江弘子：『三重県における近代以降の歴史的街道空間の変容の特徴と要因』『交流から見た伊勢湾文化』三重大学伊勢湾文化総合研究グループ、pp.1-15、1996年3月

# 初瀬街道沿いの城郭群

## ―戸木城籠城戦から―

### 藤田 達生

天正一二年（一五八四）四月九日、羽柴秀吉軍と織田信雄（信長次男）、徳川家康連合軍は、尾張国長久手（愛知県長久手町）で激突した。膠着した戦況を打開すべく、秀吉方の池田恒興・森長可は、家康の拠点三河岡崎への迂回攻撃を献策する。それに同意した秀吉は、甥三好秀次を大将として進発させるが、家康に攻撃されて壊滅的な敗北を喫した。

戦線の建て直しのために、秀吉は敗戦直後に作戦を変更する。すなわち家康との直接対決にこだわるより、信雄に圧力を加えることをめざしたのであった。信雄を孤立させ講和に持ち込めば、参戦した家康の大義名分が失われるからである。

その具体策のひとつが、信雄の領国である南伊勢への派兵である。ここを守備した信雄の重臣・木造氏は、要害の戸木城（三重県久居市戸木町、以下、

三重県内の地名には県名を略す）に籠もり、秀吉方の蒲生氏郷（近江日野城主）や織田信包（信長弟、津城主）をはじめとする秀吉方の大名連合軍の攻撃を受け、約半年間にわたって抵抗する。

この戦争の最大の特徴は、秀吉方勢力が戸木城を包囲する付城群を配置した点である。攻撃・守備拠点としての機能を果たす付城あるいは陣城（繋ぎの城）を、ごく短期間に多数構築して敵城を孤立させるといった戦法は、戦国末期から豊期にかけて全盛となった。

木造氏は、あえて本城である木造城（久居市木造町）を捨てて戸木城に籠城した。周囲に水田の広がる湿地とはいえず、平城では秀吉の派遣する軍勢に対抗できないと判断したのであろう。戸木城は、初瀬（奈良）街道を取り込んだ河岸段丘の最南端に占拠されている。ここは西側は谷を隔てており、北側

は沼田に面した微高地である。唯一、野辺（久居市）につながる要害性の低い東側は、地図（一八九一年作製大日本帝国陸地測量部「久居町」）や空中写真（一九四七年米空軍撮影）によると、堀を設けたり初瀬街道を屈曲させることで対処していたとみられる。

戸木城の主郭は、現在の戸木小学校にほぼ重なり、その周囲に町場が形成されていた。空中写真などの分析からは、主郭内部に初瀬街道を取り込んでいたと推測される。また一九七七年におこなわれた小学校グラウンドの発掘調査によつて、堀の一部が検出している。

城下町は、家臣団屋敷と寺社を中心に構成されていた。家臣団屋敷については、城郭の西側を固める重臣大塚氏の邸宅が、戸木町字大塚にあつたといわれる。同様に、東側の防衛を意識した重臣田中氏の邸宅が、戸木町字桃里に配されていたとされる。これらはいずれも、戸木城に接して段丘面と初瀬街道を取り込んで存在していた。

寺社については、現在戸木町に存在する大蔵寺に、隣接する羽野の字導垣内からの移転伝承がある。おそらく戦国初期におこなわれた城下町の整備にあつて、木造氏が近辺の寺社を移転させたのであろう。

戸木城には、城下町防衛のための支城があつたといわれる。それは城下町の北西外縁部に位置する式内社・敏太神社（戸木神社）の裏山に築かれた宮山城である。軍記物「木造記」の記載

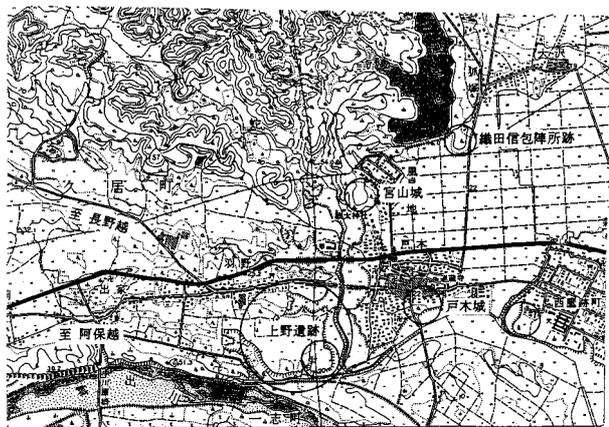
によると、城下町を望む要衝であること、また後述するように秀吉方勢力がここを陥落させて付城に改修していることから、その蓋然性は高いであろう。

（天正一二年）四月十二日付羽柴秀吉覚（長浜八幡神社文書）によると、秀吉が戸木城に比較的近い地域の領主である小島・田丸・神原の三氏にあてて、戸木城に対する付城を四力所、嚴重に普請するように命じたことがわかる。

小島氏は、織田信孝（信長三男）の異父兄で神戸城主（鈴鹿市）である。田丸氏は、北畠氏の有力一族で岩出城主（玉城町）であり、小牧・長久手の戦いの終結後は、松ヶ島城主となつた蒲生氏郷の与力大名となつている。神原氏は徳川家康の四天王といわれた榊原康政の本家にあたり、榊原城主（久居市）であつた。神原氏は、一族が敵味方に別れて戦うという悲劇に見舞われたのである。

二〇〇〇年二月の戸木町羽野の上野遺跡における発掘調査で、河岸段丘を背後の台地から独立させるために穿たれた直線・直角の大堀が発見された（写真を参照されたい）。

北側の堀は、幅約八メートル、深さ約二メートル、東西約一〇〇メートルの規模をもち、内側に土塁遺構の一部が残存していた。北側の堀にほぼ正確に直交して谷筋に向かう西側の堀は、発掘が中断されており全長は不明であるが、幅や深さは北側のそれと同規模である。また河岸段



上野遺跡周辺図

丘の南東先端部では、「L」字状で幅約二メートル、深さ約一メートルの二重堀が発見されている。

これらは、明らかに城郭遺構とみられる。立地的には、戸木城方面の見通しがよく、高度な土木技術が窺われることから、秀吉の命じた付城のひとつとみられる。城内は、約二万平方メートルの規模をもっているのだが、いまだに規模に見合った建造物群の遺構はみつかっておらず、関係遺物も遺構の規模に比して少ない。その理由は、戦後、資材が他の戦場や城郭などで転用されたからと考える。

上野遺跡で発掘された付城遺構は、単体では全国でも最大級の規模をもつ。大堀は、軍事的緊張のもと短期間に掘削され、城内には駐屯用の簡素な建造物や柵列のみが設けられていたと想定



発掘された上野遺跡

される。このように遺構がきわめて良好に残存し、しかも一次史料も伝存する付城は、全国的にも希有な事例である。

それでは他の三カ所の付城は、どこに築かれたのであろうか。

その第一は、前述した宮山城である。現在も、敏太神社の裏山に残存する遺構は良好で、周囲を土塁に囲繞された矩形の主郭や二折れ虎口（城郭の出入口）など、随所に織豊系城郭の特徴がみられる。位置的にみて、ここで秀吉方の武将が指揮し、初瀬街道を掌握しようとしたと考えられる。山上が指揮所で、山麓の現在の神社の境内付近には土塁状の遺構がみられることから、兵士の駐屯施設があったと推測される。

第二は、二〇〇一年七月に戸木城の北方約一〇〇〇メートルに位置する風早池の

東山の字「城山」で発見された。当城については、宮山城の縄張を九〇度傾けたような構造をしており、堀などの遺構の残存状況も、比較的良好である。

『木造記』にみえる、「織田上野助は、風早大明神の池之上に付城を拵て、惣大将として陣取玉ひける」に該当するとみられる。ここが、総大将織田信包の籠もった本陣であろう。信包の城下町・津から戸木に至る街道沿いに位置することからも、街道を掌握する目的から築かれたのであろう。

第三は、のちに久居陣屋が設けられた河岸段丘の南西部に築城されたと考えられる。ここは戸木城を東から見通す適所であり、他の付城の配置からもこの位置以外には想定することが不可能である。ただ陣屋普請の際に遺構が破壊されたと思われることから、推測にとどめざるをえない。

以上から、秀吉が戸木城攻めのために築城を命じた四つの付城の配置については、ほぼ確定できたと考ええる。これによって、戸木城は段丘によって比高差のある南側を除き、東・西・北の三方向を押さえられ、まさに袋の鼠といてよい状況に追い込まれたのである。しかも注目したいのは、戸木城から各付城まで直線距離で一〇〇〇メートル以内の距離しか隔たっていないことである。

最後に、戸木城攻めの付城群においては、他の戦争で築かれた付城とは異

なっており、相互の優劣がそれほど明瞭でないことを指摘したい。たとえば、秀吉の播磨三木城攻めの付城群、あるいは明智光秀の丹波八上城攻めのそれには、明らかに大将の籠もる指揮所と、兵士の駐屯所との違いが明瞭に現れている。

確かに戸木城攻めの付城群においても規模の違いは認められる。しかし確認できる三つの付城については、どれも相当の技術と資本が投入されているのであり、自然地形を用いたり手抜きはみられない。おそらくこれは、それぞれに織田氏や蒲生氏といった秀吉方の有力大名が籠もったためと考えられる。

参考文献

- 藤田達生編、『三重県久居市上野遺跡に関する総合研究』（平成一三年度三重大学重点経費成果報告書）
- 高田 徹、『三重県久居市所在の宮山城・城山城について』（『城館史料学』創刊号、二〇〇三年）

ふじた たつお  
教育学部教授・日本史学

# 齋宮の道

齋宮歴史博物館

榎村 寛之

## 一、古代官道の問題

齋宮歴史博物館という所に勤めているとよくあるのが、「齋王ほどの道を通って齋宮に来ていたのか」という質問である。

実はこれには大いに困っている。古代、具体的には奈良時代に造成された、平城京・難波京・大宰府を結ぶ山陽道をはじめとする官道は、中世以降の道とはかなり異なるものであった。地形に規制されない程度の平野部では、幅一〇<sup>メートル</sup>級の直線道路なのである。江戸時代の五街道の幅がせいぜい五<sup>メートル</sup>の道だったことを思えば、必要なまですに広いことがわかる。実際、こうした道は軍事利用を想定したもので、各国に置かれた「軍団」や、

一戸から一人兵士を徴発する兵制と関連するものであった。

そして地形的に見ると、これらの道は、田地を畷盤目条に区画する条里制と密接に関わっていた。条里を区画する道を太くしてやると、すぐに幅の広い直線道路になるのである。このように、律令制下の道路制度は、いわば土地の区画・開発と軍事体制に規制されていたといえる。

ところが、この軍事体制は、平安時代に大きく転換する。軍団と徴兵制が廃止されたからである。官道制を支える大きな柱の一本である軍制崩壊の影響は、道路政策に直接現れた。必要なまですに広い官道が、本当に不必要になったのである。官道は次第に細くなり、

わずかに条里遺構の一筋の畝として残るようになる。全国で確認されている古代道路には、こうした歴史を持つものが多い。

さらに難しいことに、平安時代中期頃の文献には、官道の状態や立地などを記したものがほとんどないのである。

同じことは齋王の群行路についてもいえる。齋王制度は、奈良時代から鎌倉時代まで続いていたわけなのだから、「齋王がどの道を通っていたか」といわれても、概観的なルートはともかく、恐らく時代によって変わっていたであろうし、本当にわからないのである。

## 二、齋宮跡における道の遺跡

さて、一方で現在、国史跡に指定され、継続的に調査が進められている齋宮跡では、いくつかの古代の道の痕跡が確認されている。

例えば、現在の近鉄齋宮駅から齋宮歴史博物館に向かうとすると、齋宮駅からまず西に向かつて、近鉄線沿いに続く道は、奈良時代末期の計画道路に沿っている。

つぎの踏切を超えて北進する道は、平安時代中期、一一世紀頃

に整備されたことが発掘調査からわかっている。

さらに進んで、博物館方向へ左折する半分だけ舗装された変な道路は、奈良時代に造成された官道である。

つまり、近鉄齋宮駅から齋宮歴史博物館まで、「奈良・平安時代の齋宮の道」を歩いていることになるのである。

しかし、だからと言って、今歩いている道路がそのまま古代の道、というわけではない。

まず、道路 について見ていこう。この道路は、博物館ができるまでは、幅一<sup>メートル</sup>もない道だったのである。ところが博物館周辺の発掘調査が進展するとともに、この道路の左右から、何本もの側溝跡が確認され、奈良時代には幅九<sup>メートル</sup>の道だったことがわかってきた。そして、この道を西に延長すると、松阪市南部の「馬部のへた」町に至り、さらに齋宮歴史博物館学芸員の伊藤裕偉氏の指摘によると、この道は、齋宮のある多気郡に隣接する飯野郡の条里と方向を合わせているのである。条里に沿った道で、駅関係の地名が沿道にある。つまりこの道は、おそらく鈴鹿関から伊勢神宮を経て志摩国府に至る官

道だったと考えられる。しかし地図上に落としてみても、史跡外でこの道の延長線上に正確に一致する道は、一部近世の参宮街道と重なるほかは、ごく断片的なものなのである。(写真1)

次に道路 について。

現在この道には、側溝が左右に付いているが、これは数年前に整備されたものである。つまり、発掘調査によって確認された溝の遺構表示という役割をも果たしている。この溝の遺構は、場所にもよるが、深さ六〇センチ以上、底の幅が三〇〜七〇センチもある立派なものなのに、道幅は道に比べると各段に狭く、せいぜい三メートルに過ぎない。この側溝は一一世紀頃に掘削されたものらしく、道幅は、一〇〇〇年近くにわたり、ほとんど変わっていない。(写真2)

最後に道路 について。この道は、奈良時代後半(七七〇〜八〇〇年頃)に、史跡西側に造成された齋宮の方格地割を構成する直線道路の推定線に沿っている。この区画は道路によって最大個所で東西七列、南北四列に区画され、各区画は一部の例外を除き、一一〇



写真1 道路 (古代宮道跡)

四方となつていいる。道路の原形と見られる道については、東に延伸した部分で発掘調査によって全貌が明らかになっているのだが、どうやら道路幅は官道より広く、溝の中心から中心までの幅が四〇〇尺、約一二メートルもあつたりしい。こうした道路は史跡内の各所で現在も使われているが、そのほとんどは幅二メートル程度の道と化している。ただ一箇所、いつきのみや歴史体験館から北に、齋王の森に向かって伸びる道は、齋王の森の前で発掘調査に基づいて修景されて

おり、左右の溝とともに幅約一〇メートル以上の古代の区画道路を体感できるようになっている。(写真3)

このように三本の道を比べてみると、古代においては道というものが実に多様な意味を持っていたことがわかる。まず奈良時代の官道である道路 は広く造られたが、日常的にはほとんど意味をなさないものであった。平安時代になつて作られた道路 が、しっかりと造りなかに幅二メートル程度のものは、当時の実用的な道路のありかたを示すものだろう。

ところが一方、道路 は、明かに軍用道路ではないのにも関わらず、最大幅二メートルと、官道をしのぐものであった。これは平安京や平城京と同じく、企画性の高い区画を造営できるという事実によつて、王権の権威付けを図つたものと考えられよう。これこそまさに、実用的な必要性は全く無いに等しいにもかかわらず、王権が齋宮のために造つた道路なのである。

### 三、齋宮跡と「齋宮辻」

さて、こうした齋宮跡の道路は



写真2 道路 (平安時代の道路)

施設としての齋宮の廃絶した鎌倉時代後期以降どのように扱われていたのか、二、三の史料を紹介しておこう。

室町時代の応永二五年(一四一八)、將軍足利義持の伊勢参宮に随行した花山院(藤原)長親という貴族の旅日記『耕雲紀行』に次のような一節がある。(伊藤裕偉氏の教示による)

「ここかしこゆきすきて、齋宮のつしといふ所あり。むかしの齋宮のあとなり。木竹しけりあひて、

いつくともみえぬやぶのうちなり。  
あれてひさしけれとも、いまもそ  
のしるしに、空より絵馬をかくる  
ことたえず。これによりて、土俗  
あるひはゑむまのつしともいふと  
かや、さきさきはきかず、このた  
ひの downward に、案内者ありてかたり  
しかは(下略)。

ここには、齋宮の辻、あるいは  
絵馬の辻というものが見えている。  
そして同じく室町時代の興福寺別  
当であった、九条家出身の僧侶で  
ある経覚の日記『経覚私要抄』の  
寛正二年(一四六一)正月の記事  
にこのようなものがある。

「伊勢齋宮辻絵馬、当年黒シテ  
稲ヲ負云々、吉凶如何。」

どうも『耕雲紀行』では、齋宮  
の辻の絵馬の話は、案内者から聞  
くまでは知らなかったようだが、  
四三年後には、興福寺の高僧が、  
奈良にあって絵馬の吉凶を気にす  
るほどになっているのである。

そしてこの絵馬は、室町時代後  
期に作られた謡曲『絵馬』に、「絵  
馬の馬の毛色で翌年の晴雨豊凶を  
占つ」として出てくるほどに有名  
になっていくのである。

『郷土史に見る齋王』(一九七八  
年 明和町 絶版)所収の「齋宮  
村郷土誌」(一九三五年 齋宮村商

工会編)の「絵馬殿」の項目によ  
ると、

「いつしか、十二月晦日の真夜  
中に、新しく掛け替えられる絵馬  
の図様によつて、翌年の豊凶を占  
ふことが出来るといふ噂が弘まり  
ました。その絵馬は縦一尺五寸許  
り、横二尺余りの無地の木板の中  
央に水墨で稲束を背負つた馬を描  
き、その上に打ち出の小槌と、龍  
の玉の模様を配した砂金袋と、隠  
れ笠と、隠れ蓑とが描かれてあり  
ますが、その馬が背負つた稲束の  
色調によつて、早稲が何分、中稲  
が何分、晩稲が何分と現されるの  
だと云ひ伝へられています。之を  
『齋宮の世だめし』と申しました。  
(仮名遣い原文のまま)」

という。さらに、北伊勢から伊  
賀・大和・山城などに「絵馬講社」  
があり、代参者が見に来たり、一  
九三五年頃にも手紙で「世だめし」  
の問い合わせがあったとしている。

そして、この「齋宮辻」は現存  
している。絵馬堂の伝承地は、齋  
宮の方格地割の東の端の南北道路  
と、現・参宮街道が交差する所な  
のである。この南北道路は現在も  
道として使われており、その西側  
を流れる側溝を兼ねた小川は、「エ  
ンマ川」つまり「絵馬川」といふ。

しかも、この交差点には、室町時  
代に六地藏石灯が建てられている  
(この六地藏も場所を少し東よりに  
して現存)。高橋昌明『酒呑童子の  
誕生』(中公新書)によると、中世  
京都では、六地藏は辻に立てられ  
るものなのである。このような絵  
馬伝承と六地藏の存在から、齋宮  
の境界は齋宮廃絶後も生きつづけ  
ていたことがわかる。

ただ、「齋宮村郷土誌」では絵馬  
殿の位置を、参宮街道とエンマ川  
の交差点より北としており、江戸  
時代の絵図でも、もう一本北の細  
い道との交差点に絵馬殿を描いて  
いるものがある。現在の参宮街道  
は方格地割の北から四本目、齋宮  
内院の南側に面した道路が原形だ  
と考えられるので、あるいは一本  
北の道路との交点が本来の「辻」  
であったのかもしれない。

いずれにしても、一〇世紀の  
『延喜齋宮式』によると、齋王は伊  
勢神宮に参詣する時、齋宮の東の  
境界で祓え(はら)えることになつてお  
り、そうした境界意識が齋宮廃絶  
後も「辻」として残つたものであ  
ろう。

それにしても興味深いのは、単  
なる土俗伝承のような占いにこれ  
だけの関心が集まつたことである。



写真3 「齋王の森」前の道(方格地割区画道路)

「齋宮」という言葉、そして「道」  
の築いた結果は、齋宮の制度的廃  
絶から百年以上過ぎてても、強いイ  
ンパクトを保ち続けていたのであ  
ろうか。

えむら ひろゆき



## 関町関宿の町並み保存

### 寺嶋 吉明

鈴鹿郡関町の町並み保存の歴史は古い。法整備の面からいえば一九八〇年（昭和五五）に関町並み保存条例が制定され、一九八四年（昭和五九）には文

化庁から国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた。すでに二〇年を経過しつつある。

関の町並みの価値は、宿場町独自の形態である街道に沿って一本街村状に四〇〇戸の町屋が軒を連ねる景観にあり、その長さは約一・八キロメートルにもなる。東海道沿いは高度経済成長期に特に開発がすすんだ地区であったことから、ほとんどの地区が歴史的な町並みを残せなかった。そのため関宿が東海道で唯一、伝統的な建造物を有する町並みを残す地区となったのである。また関の町並み保存は「観光化しない」ことから始められたと

ころにも、注視する必要があり、その意味で文化財保護法を尊重し、保存に取り組んでいる地区といえる。

関の町並みの価値は、近年になって見出されたものではない。それは大正一二年から昭和八年まで町長（旧関町）をつとめた大北源次郎おきたげんじろう氏の頃に、保存をしていこうという動きがすでにあり、大正の頃には江戸時代の面影が貴重となっていたことも窺い知れるが、この頃の町並み保存の動きを引き継いだとすれば、町並み保存の歴史は八〇年を超えることになる。そして町並みは、地区にお住まいの方々のご

理解とご協力のもと、役場との連携のもとすすめられ、今日も町並みを「残す」努力が、一日も休むことなく継続されている。

しかし、町並みの保存の取り組みは建物の保存だけにとどまるものではない。保存に対する啓発活動として町並み保存会の皆さんが活動をされておられ、その広報誌として「町並みかわら版」を作成している。紙面は防火意識の向上のほか、関宿の歴史、他の宿場や伝建地区の情報などだが、これを町内全戸に配布し、保存地区外にも町並み保存に理解を求めている。また関宿周辺の松並木の復元や、夏祭りには保育園や幼稚園の子供たちに関の商家に伝わる「子山車」(こやま)を曳かせるなど、伝統文化にふれるきっかけづくりを通じて、町並み保存の裾野を広げている。

また、近年は関の町並みが景観的に優れていることから、保存地区への観光客の流入は激しくなっており、休日になると町並みが観光客であふれかえることも少なくない。観光客のマネーはけっしてよいとはいえず、町屋への覗き込みや、私有地への入り込みなど、用心が悪くなつたと感じる人は年々増えている。特にバスでくる団体客は、関の歴史にふれるでもなく「ど

つときて、さっと帰っていく」騒がしいだけの存在で、評判がよくなかったが、町内の有志の方々が、無償でガイドを引き受け、地域とのトラブルが起らないよう案内をされてからは、団体の観光客はいても町並みは落ち着いているように感じる。現在三〇名前後の方が参加されているが、近年の出動回数はおよそ四〇〇回を超えているから毎

日、誰かが案内をしている計算になる。

また、ガイドの方々は月一回研修会を開き、歴史などの知識を蓄えるよりは、どのようにわかりやすく伝えるか、団体客の動線のみこした案内、安全な案内(事故防止)とはなにかについて研鑽されておられる。

町並み保存にかかわる方々は、まだまだおられて、とても書ききれない。

一昨年の二〇〇一年は近世東海道が開設されて四〇〇年という節目の年であった。三重県も県内の東海道沿いの各自治体もイベントを企画して街道文化を育んだが、関宿では、町並み保存会が音頭をとって例年おこなわれている街道祭りの前夜祭として、四〇〇周年と四〇〇軒という数字をかけた四〇〇個の灯

籠を作り、保存地区約一・八は段の街灯をすべて消灯し、江戸時代の夜の再現を試みた。

灯籠はすべて町民のみなさんの手作り。町内の建具屋さんへ技術指導してもらい、加工をし、灯籠の障子張りには老人クラブの方々が協力。おかげで前夜祭には無事四〇〇戸の町屋の軒先に灯籠がならび、江戸時代の夜を再現できた。むろん役場をはじめ、町内諸団体の協力があったればこそであるが、そこには、業者が闊歩する都市型のイベントの姿はないのである。

てらしま よしあき  
人文社会科学部地域文化論専攻  
日本近世史



特集

# 亀山市・関町の研究

## はじめに

平成一六年一月二七日、三重大学と亀山市、関町とのあいだで、文化・教育、学術の分野での協力を定めた「相互友好協力協定」が締結された。これは、尾鷲市、上野市、四日市市について、ちょうど四、五番目の締結にあたる。大学院人文社会科学部研究科では、この「協定」に先行するかたちで、平成一五年四月より、亀山市、関町にて大学院生たちによる調査研究を続けてきた。

そもそも、本研究科の大学院生が、三重県下の自治体で組織的に調査研究活動に従事するようになったのは、平成一三年度に新設された講義科目「三重の文化と社会」の開講に端を発する。この講義を履修した大学院生たちは、これまで、一三年度には香良洲町、一四年度には紀伊長島町で、個々の専攻にもとづく研究を進めてきた。

そして今回、一五年度は、シャープの誘致等により県下で最も変化の著しい地域であり、また関宿など歴史・文化的な事象も数多い亀山市、関町の二つの自治体を対象地とした。豊富な「研究材料」に囲まれた大学院生たちは、フィールドワークや調査活動を通じて、自らの研究を着実に発展させていった。六月のジェネラルサーベイ、八月の合宿、そして月一度のミーティングや現地での調査を重ねながら、八月用余りにわたる研究をようやくここに結実させることとなった。以下に掲載する研究報告は、こうした研究成果の概要をとりまとめたものである。これら地域研究の成果が、現地の方々、ならびに読者の方々にいささかなりともお役に立てば幸いであると考えている。

なお今回の亀山市、関町での調査研究は、亀山市役所、関町役場をはじめとする関係諸機関、ならびに住民の方々のご協力なくしては実現しえなかった。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

科目指導教官

石阪督規

いしざか とくのり

人文学部助教授

鹿嶋 洋

かしま ひろし

人文学部助教授

## 「三重の文化と社会」 報告会

2004年1月24日に、亀山市総合保健福祉センターと関町老人福祉センターにおいて、「三重の文化と社会」の現地報告会が開催され、亀山市、関町の両会場であわせて約80名の参加がありました。報告会の様子は、翌日の新聞紙上でも取り上げられるなど、どちらもたいへん有意義な報告会となりました。報告の成果については、報告書「亀山市・関町の研究」(A4、全73ページ)としてまとめられています。



会場風景 (1)



会場風景 (2)



会場風景 (3)

# 亀山市の企業誘致とまちづくり

肥田 幹子

## はじめに

近年、各地域において市街地の空洞化、産業の空洞化など、地域における空洞化問題が顕著化してきている。このような中で、亀山市は三重県と連携し、シャープ株式会社（以下「シャープ」と略称）の液晶工場の誘致に成功した。産業は地域にとって欠くことのできないものである。しかし、企業誘致が地域社会を良い方向へ変えるとは限らない。地域社会がより良い変貌を遂げるには、企業・行政・住民が互いに連携し、行動を起こすことが必要だと考えるからだ。そして、地域を魅力あるものにするのが、企業の更なる進出・定住化を促進し、それが若者を定住化へと向かわせ、また地域全体への波及効果へとつながると考える。本稿では、亀山市住民に行った「魅力ある地域づくりを調査す

るためのアンケート」を中心に、亀山市がシャープ進出を、魅力あるまちづくりにどう生かしているかを探る。

## 一、企業誘致とまちづくり

国内産業は現在、若者の現場離れ、日本企業のアジア進出などにより空洞化の危機に直面している。シャープ亀山工場の誘致は、年間出荷額四千億円、一五〇〇人の新規雇用が創出されると言われている。企業誘致は、地域経済・雇用に計り知れない波及効果をもたらす、地域社会の活性化にもつながるだろう。

しかし、特に特定大企業の立地は企業城下町を形成することが多い。シャープ亀山工場においても、液晶産業という特殊かつ高成長産業であり、液晶以外の技術は蓄積されにくい。また、激しい国際競争の展開の中で、企業の衰退や撤

退による地域の衰退も考えられる。今後、亀山市が産業を持続的に発展させるためには、誘致した企業を定着化させ、新たな企業の進出を図ることが必要であろう。そのためには、地域の居住環境を整備する必要がある。なぜなら産業は、ひとから生まれ、ひとやその地域によって発展するからである。生活環境がよければ、人が定着し新たなものも生まれやすい。この可能性を他の分野にまで広げ、産業だけでなく「まち」全体に活力を与える必要がある。それには、

地域住民の果たす役割が大きい。地域住民は、住んでいる当事者であり、自分たちの「まち」の良いところも悪いところも知っている。「まち」を生かすも殺すも住民次第と言っても過言ではないだろう。

シャープの進出は、亀山市に大きなチャンスをもたらした。魅力ある地域づくりには、シャープという大企業の立地を、地域をより良くする転換のチャンスと捉え、このインパクトを住民がどう利用できるかが必要だと考える。

## 二、多気町ではどうか

多気町は、一九九五年のシャープ進出後、「シャープのまち」として名を馳せてきた。そこで、多気町が、株式会社ミエテック・シャープ株式会社従業員を対象に、二〇〇二年九月に行った「多気町まちづくり拠点整備計画 アンケー

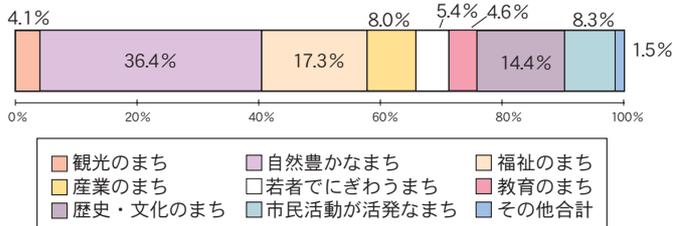
ト調査結果」をもとに、他地域から越してきた人々が地域に何を求めるかを分析する。

性別は男性が九六・二％と圧倒的に多く、年代では約八割が四十歳以下と若者層が多く、この調査からは若年層が地域に求めるものが何かを把握することができる。まず居住区では、松阪市（四一・九％）に住む人が多く、工場がある多気町には二九・八％が住んでいる。多気町にすまない理由として、生活利便施設が少ない（一九・八％）、交通の便が悪い（一八・一％）、マンション等住むところがない（一六・四％）が挙げられる。また、多気町にあれば良いと思う施設の中で、ショッピングセンター（五五・二％）、レストラン（三六・三％）、飲食店（三二・八％）、映画館（三二・三％）、共同駐車場（四五・一％）等が挙げられる。他地域から入ってきた人々の視点によって、その地域の問題点が明らかになる場合が多い。この問題点が、実際に亀山市ではどのような状況かを次に検証し、住民によるまちづくりにどう生かせるかを考察したい。

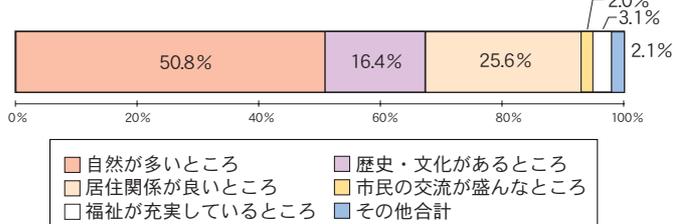
## 三、住民は どう捉えているか

次に、産業立地が促進されている亀山市に住む人々が、現在の生活環境や住んでいるまちへの意識、新産業に対する期待や不安につい

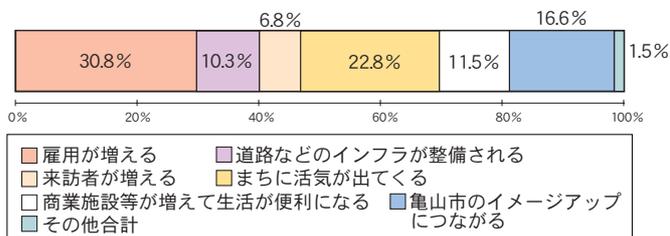
＜図1＞亀山はどのようなまちになっていくべきだと思いますか。



＜図2＞亀山の好きなおとこ・良いところはどこですか。



＜図3＞どのような期待を持っていますか。



て行ったアンケート結果を報告する。多気町の事例では、多気町に住まない理由として、「生活利便施設が少ない」が挙げられているが、これは亀山市にも当てはまる。六一・八%の人がショッピングセンターや百貨店といった、大規模かつ専門化された施設が欲しいと感じており、これが鈴鹿市の大型ショッピングセンターに人が流れる原因であると考えられる。また、飲食施設に関しても、七六・一%の人がレストランや喫茶店を求めている。亀山市には、旧一号线沿いに四・五軒チェーン店があるも

の、亀山市でしか味わえないような飲食施設は少ない。亀山市にしかない飲食施設があれば、近隣市からその食事を目当てに訪れる人も少なくないのではないだろうか。次に、図1より住民が望む亀山市のまちづくりを見てみると、上位より「自然豊かなまち」(三六・四%)、「福祉のまち」(一七・三%)、「歴史・文化のまち」(一四・四%)となる。また図2より、「自然が多いところ」(五〇・八%)、「居住環境が良いところ」(二五・六%)、「歴史・文化があるところ」(一六・四%)が、亀山市の良いところ

として挙げられている。図1と図2の結果より、亀山市には豊かな自然と古い歴史や文化が残っており、それを活かしたまちづくりを行うべきだと考えている人が多いと分かる。また、居住環境の良さは、企業定着の要因になるとも考えられるので、今後も住環境を整備していく必要があるだろう。さらに、亀山市の改善すべき点としては、「交通の便が悪いところ」(三三・五%)が挙げられる。これは、多気町の事例でも同じ要望が出ていたが、車社会の反面、公共交通機関を利用したいと考える人も多いと思われる。利用者のニーズに合わせた、市街地循環バスを増やすことで、買物を市内で済ます人も増えるのではないだろうか。2番目の課題は「若者にとって魅力がないところ」(一六・一%)である。これは特に高齢者側から言われることが多く、若者がいないことへの不安感が募っていると考えられる。若者が定住しなければ、そのまちは老人のまちと化し、後には消えてしまう可能性もある。自分たちのまちを守りたいという意気込みとも感じられる。シャープへの期待(図3)として最も多かった回答が、「雇用が増える」(三〇・八%)であった。この不況の中で、大企業の進出に伴う雇用面への波及効果を期待する気持ちが見える。しかし機械化が進む日本において、企業進出イコ

ール雇用創出とはいかないのが現状である。また、企業進出による雇用創出には、企業撤退による失業創出というリスクも生み出しかねないということを認識する必要がある。この事態に備えて、新規進出企業のみではなく、地場産業の基盤を強めることが必要となるだろう。

シャープ誘致に伴う不安面としては、「環境が悪化する」(三〇・九%)、「交通渋滞が起こる」(二七・九%)、「居住環境が悪化する」(二二・八%)等、日常生活への影響を懸念する声が大きい。現段階において既に、猿による被害等、山を開拓したために出てきた環境問題を訴える人が多い。また、国道一号の朝夕の混雑に困っている人も多い。今後住民生活における不安要素を改善する必要性が高まるだろう。

#### 四、魅力あるまちづくりへの可能性

亀山市は今大きな転機を迎えようとしている。行政側は、シャープや関連企業の進出に合わせ、都市整備を急ピッチで行っている。企業側として、多気町のシャープでは社会貢献活動が行われており、これは亀山市においても実現可能な活動であり、今後期待が持てる。住民側では、企業進出に合わせた動きは今のところ出てきていない。しかし、二一、三年前から、

亀山市・関町の研究

河川NPO比較検討

住民によるまちづくりへの動きが活発になっており、シャープ進出をバネに、現段階でできることから始めることは可能だ。例えば、住民が考える亀山市の魅力ある点である「自然」「歴史・文化」に焦点を当ててはどうか。「自然」では、エコツーリズムを通じて自然に触れ、環境保全に協力することで、亀山市への愛着を深めることができる。「歴史・文化」については、傘鉾祭り、かんこ踊り等の伝統行事を継続させ、さらにかつて地域に根付いていた伝統文化を復活さ

せるなど、祭りを通じて若年層と高齢層の交流の場を築き、地域に活気を取り戻すことができるのではないか。その他、亀山市で購入できるものは亀山市で購入してもらう、いわゆる地産地消運動を促進することも可能であろう。現在既に、毎月第一、第四土曜に「亀の市」という朝市が開催されている。この朝市の情報を聞きつけ、亀山市以外の地域から訪れる人も少なくない。有機栽培など、安心・安全な食品を求める人が増加する中で、亀山市で買いたい時に

安心できる農作物が買えるならば、わざわざ鈴鹿市まで足を延ばす必要もなくなるだろう。

おわりに

亀山市には、最先端技術を持つ企業が進出し、その一方で亀山宿という江戸時代の城下町の面影も残っている。地域に住む人々は、自分たちの「まち」をもう一度見直し、これら新旧をどのように分断・融合していくかを考え、住み続けたいと思えるような、他地域とは違う特色をもった「まち」を

創り上げていける存在である。魅力ある地域とは、産業や環境、そしてそこに住む人々が元気なまちである。亀山市の企業・行政・住民は、シャープ進出のインパクトを契機に、自立した地域へと変貌を遂げることができるよう、各々で行動すべき部分は各々で、協働できる部分は協働で行動を起こしていくべきである。

ひだ みきこ  
人文社会科学研究所地域文化論専攻  
社会学

中原 栄子  
平石 恵理

戦後 地域住民らはあらゆる問題が起こって初めて行政等に対峙するといった活動を行ってきたが、それはいわば受身の活動であり、それは対立関係を含んだ様相を呈していた。

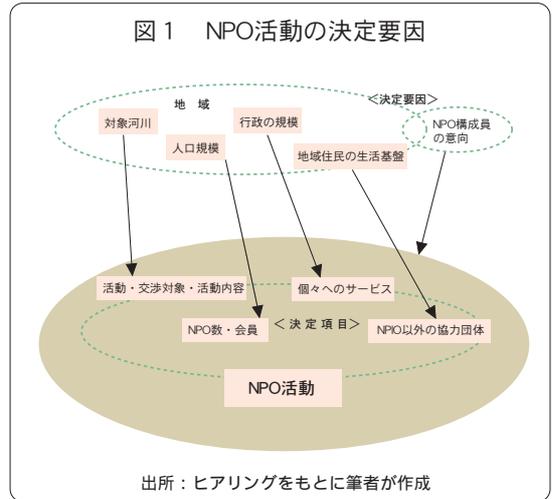
そのような状況に変化が見えてきたのはここ数年である。後方的な活動ではなく、行政、産業に先立つ、もしくは同時期に活動を行うNPO (Non-Profit Organization: 非営利団体)の台頭が注目を集めている。

NPOは自主性・自発性を有する独立した団体を指し、非営利であるものの有償、無償双方の事業を行う。平成十年には特定非営利活動促進法(NPO法)が成立し、住民サイドならびに行政サイド双方による協働を円滑に進めるための基盤整備も少なからず進んでいる。

本稿では亀山、名古屋の河川に関するNPOを事例としてとりあげる。一九七〇年代の高度成長期以降、日本における河川環境は戦後の工業化に伴い、回復の兆しは今だ小さい。しかし、平成九年の河川法改正によって、その活動の幅は広がりを見せる。法改正により、「河川環境の整

備と保全」、「地域の意見を反映した河川整備に関する計画制度の導入」という「環境」の項目が新たに組み込まれ、河川NPOの活動がより活発に行われる下地が少なからず整ったことになる。

今回の調査対象は河川に関する活動を行う亀山市のNPO「水辺づくりの会鈴鹿川のうお座」と名古屋市の「名古屋堀川ライオンズクラブ」の2団体である。二〇〇三年一〇月に双方の団体へヒアリングを行い、必要に応じて、各団体の主催する研究会への出席や、ホームページや新聞等より情報収集を行っている(表1参照)。



地域住民の生活基盤や、特に河川NPOに関しては対象河川の性質に関する相違は活動内容や団体規模、他NPOを含む協力体系といった活動のあり方そのものに相違点を生み出すと考えられる。また、NPO構成員の意向も活動の相違を生む決定要因となり得る（図1参照）。今回調査した両団体はそれぞれを取り巻く環境に則してうまく活動の幅を広げている。これはNPOのあり方が画一的なものではなく、多様であることを示唆するものと考えられる。

第二に、人材的視点から述べる。両活動は男性の発案により始まったものであり、女性からの視点に欠ける部分がある。また、市民サイドの活動であることから、市民という視点が強く反映されている。より多くの住民を巻き込んだ有益な活動に発展させていくならば、より多くの人材が一市民として意見を述べ、活動を専門的かつ多角的視野（世代別・性別・職業別など）で検討する必要があるだろう。

なかはら えいこ  
ひらいし えり  
人文社会科学研究所地域文化論専攻  
地理学  
社会学

各団体の概要は表1のとおりである。行政へ働きかける際の手法と一部の活動内容、団体自身の成り立ち、将来展望は異なる。ライオンズクラブは団体自らが国へ直接的に働きかけているのに対し、うお座は各地区の自治会や漁協といった他組織への働きかけを通じて、間接的に行政への働きかけを行っている。また、将来の展望について、ライオンズクラブは会員数や資金を増やし規模を拡大することを目標としているのに対して、うお座は新会員を受け入れる体制であるものの、規模に関しては現状維持を考えており、この点についても相違が見られる。

NPO活動の相違を生む決定要因として、第一に地域性という視点から考える。人口、行政の規模、

表1 各団体の概要

団体名	水辺づくりの会鈴鹿川のうお座	名古屋堀川ライオンズクラブ
前身団体	鈴鹿川に魚をもどす運動の会うお座	堀川の浄化と交流を実現する会
現体制の成立	2002年11月 会員数を1名から3名に増やし現在の名称で活動開始	2003年4月 ライオンズクラブとの合併を経て活動開始
主な事業（*注）	1) パリアフリーの川づくり 2) 流域調査 3) ため池等の外来魚の駆除 4) 水辺づくり条例（仮称）の実現 5) 河川工事における地元小学生の参加	1) 庄内川からの導水事業実現のための市民活動 2) 堀川の歴史博物館の実現運動 3) 堀川を通して魅力ある名古屋を考えるイベント事業 4) 機関紙発行 5) 堀川と堀川流域の街づくり調査研究 6) 政策提言
活動内容・成果（*注）	・自治体、漁協名義の要望書および提案書を行政へ提出 ・住民・行政等との高塚池かいりぼり ・ネコギギの調査 ・「御贄祭」復活活動への協力	・庄内川からの試験通水の実現 ・調査研究および市民大学の講座開設 ・署名活動への参加 ・国の助成事業対象団体に選出される
活動形態	既存のコミュニティや個人単位への働きかけによる協働	市民を巻き込んだ独自活動 （[アクションを起こす] [結果を報告] [市民から資金を徴収]の循環による活動）

（\* 前身団体の活動を含む）出所：ヒアリングをもとに筆者が作成

# 亀山老人保健施設にみる 入所者家族の現状

—入所者と家族の関係と—

それに及ぼす施設の地理的要因について—

緑川 奈那

## はじめに

一般に、社会福祉施設は中心街からひときわ離れたところに設置されていることが多く、高齢者施設に關しても例外ではなかった。このような環境下で、要介護者を施設に入所させようとすれば、入所者と家族は、在宅時と比べ空間的にも時間的にも引き離される場合が多くなると予想される。ゆえに、ここでは主として介護者側の視点から、入所者と家族の關係性を明らかにした上で施設の立地条件の重要性について広域連合地域を題材に考えていきたい。その方法として、亀山老人保健施設の入所者89人の家族を対象として今回実施したアンケート調査の結果を

もとに考察していく。

## 分析

今回のアンケート調査は40人から回答を得ることができ、回収率は44・94%であった。

「入所にいたったきつかけ」（複数回答可。全回答数81）からは、「居住環境」20人や「時間がない」16人等、介護者側の状態が入所の要因となる質問に対しての該当者の方が多かった。一方、「要介護者の」要介護度が上がった「や（要介護者との）折り合いがかんばしくない」という、要介護者側の状態の変化や要介護者との關係の悪化が問題となって入所にいたったという回答は少なかった。続いて、「施設への期待」（単数

回答）への回答結果からは、入所者家族は入所者の身体的ケア16人と入所後も入所者の体を気にかけていることが最も多いことがわかった。次に多かった回答は「入所できただけで充分」というものであったが、これは該当者が60歳以上という点から世代的な謙虚さからくるものと考えられる。他方、入所者の精神的なケアについては、数値の上では高い該当率ではなかったが自由解答欄においては、母が（ボランティアで行われる）手芸の日を楽しみにしているので回数を増やして欲しいや「母が話し相手がおらずつまら」ながっている等、入所者の精神面を氣遣っている声も多数みられた。

これらのことからかんがみて、今回の回答者に限って言えば、入所者と家族の關係性は良好な状態の者の方が多くと予測された。

また、「施設までの時間と訪問回数」の相關關係を分析したところ、短時間で通える者ほど通う回数も多くなると出てきた。家族と入所者との親密度、家族の就労状態や健康状態など他の要因を考へても、施設までの時間と訪問回数の相關は高いといえよう。

## 結論

以上の分析から、今回のアンケート回答者に關しては、入所後も入所者と家族の關係は比較的好ましい状態にあると思われる。その上で、要介護者を施設に入所させたとなる

と、介護者は入所者とのより多くの面会等の直接的な交流を望んでいることが考えられる。しかし、施設までの時間が訪問回数に影響している可能性は非常に高かった。ゆえに、今回の調査結果からいえることとして、施設の立地条件は自動車道や（特に老老介護の増加傾向下では）バスの本数等、施設までのアクセス手段を考慮し周縁部に住む者にも比較的通いやすい地域を選定しなければならないと思う。

みどりかわ なな  
人文社会科学研究所地域文化論専攻  
社会学



特集

亀山市・関町の研究

# 亀山・関地区の地域企業の企業戦略

松本 陽介

本研究は、関・亀山地域の経済活性化についての具体的なビジョンを展望する手がかりを探るべく、地域企業の経営戦略について調査を行った。調査対象には、亀山・関地区に本拠を置く、セキデン、カメヤマ、山忠食品工業の三社を選んだ。この三社は、以下のいずれかを満たしている。第一に大きな利益を上げている企業、第二にニッチ市場で成功を収めている企業、第三にある分野で成功を収め、新たな市場を開拓しようとしている企業である。そのため、当地域の他の中小企業の戦略にとつても参考になるかもしれない。加えて、地域経済振興を担

う亀山市役所商工農林課にも話を伺った。

調査の結果、以下の点が明らかになった。第一に、いずれの企業も強力なトップダウン式の経営方針であり、加えて年功序列ではなく、実力主義であること。第二に、人材の育成を重要視していること。第三に、消費者のライフスタイルに則したマーケティングを実行していること。中小企業の場合、市場の変化に大きく翻弄されやすく、常に市場の動向に注目し、素早く手を打たなくてはならない。

一方で、中小企業には不利な点もある。代表的なものには、研究費などの資金不足の問題がある。また、亀山市のように大企業の下請けによって成り立っていた地域では、産業の空洞化の影響を受けやすい。それゆえ地域内の中小企業の連携や産学官連携などが叫ばれている。その場合も、技術の発展の方向性や、市場の動向に注目しながら経営方針を決めねばならない。中小企業間の連携や産学官連携を実際に進める際には、当然、行政や大学にも企業が求めるニーズへの最大限の対応が求められる。

亀山市の産業政策をみると、〇四年に活動を開始するシャープ亀山工場のように、歴史的に大企業の工場誘致に力点を置いてきた。しかし、グローバル化が進む中であつて、誘致頼りの政策には限界も指摘されている。今こそ、地元中小企業の振興を通じた真の意味での産業集積を目指す必要があるのではないだろうか。

まつもと ようすけ  
人文社会科学研究所社会科学専攻  
経営学



2004年1月に稼動したシャープ(株)亀山工場。液晶パネル工場と液晶テレビ工場を統合した一貫生産工場で、25型以上の大型液晶テレビを月産10万台生産する能力を持つ。  
(2004年1月 鹿嶋撮影)

# 中国との関係を強める亀山市の自動車関連企業―対中投資と研修生受け入れ

王 宇谷

私は日中経済関係を学ぶ中国人留学生で、中国進出企業を対象にしようと考え、亀山市内の自動車関連企業二社に聞き取りを行った。それは(株)ヒラタ亀山製作所と(株)エフテック亀山事業所である。いずれもホンダ鈴鹿製作所に部品を納入し、本社は関東地方にあるが、一九六〇年代に亀山市に工場を進出した。以下では、両社の中国進出の経緯と問題点、中国からの研修生の受け入れの二点を報告する。

中国国内での需要拡大を見込み、日本の自動車メーカーの対中投資が活発化するなかで、部品業者もメーカーの厳しいコスト要求に応えるため中国進出を進めている。

ヒラタは、広州本田汽車に部品を供給するため、〇一年一月に広東省広州市への進出を決め、〇二年一月に操業開始した。総投資額は二八四〇万ドルで、〇五年には従業員四二〇人、売上四〇億円を見込む。進出による問題点は、第一に技術者の不足、第二に中国進出に伴う国内の生産の急減である。亀山の生産量も減少が見込まれるため、同社は国内外で新しい取引先の開拓に注力する。一方エフテックは〇一年一月に同じ広東省の中山市に会社を設立、〇三年に操業開始した。今後の競争激化を予想し、中国の自動車メーカーの需要に応じた生産体制を作っている。また国内工場の生



(株)ヒラタ亀山製作所にて



(株)エフテック亀山事業所にて(中央が著者)

産量向上も期待している。

次に中国人研修生の受け入れをみる。両社とも、生産現場を中心に非正規労働力の活用を進めている。多くの日系人に加え、研修生という形で中国人も雇用する。ヒラタでは一五名、エフテックでは一四名の中国人研修生がいる。彼らは高卒以上の学歴を持ち、技術の習熟も早い。日本語でのコミュニケーションが難点だといふ。

エフテックが行った研修生へのアンケートは、彼らの実情を教えてください。七割の研修生は、日本の労働条件は中国より良いと考え、半数は三年の研修期間の後も日本に残りたいと考えている。その理由は日本の生活水

準や給与の高さにある。しかし帰国して同社の中国工場で働きたいという者は一名に過ぎない。なぜなら彼らは山東省の出身で、同社が進出する広東省は遠すぎるからである。

今回の調査を通して日中両国の経済面での交流の実情を覗くことができた。また日本企業で働く中国研修生たちと接触でき、彼らの生活と仕事ぶりを知ることができた。末筆ながら取材に快く応じて下さった両社の担当者に厚くお礼申し上げます。

おつ うごく  
人文社会科学研究所社会科学専攻  
アジア経済論

# 亀山宿助郷と幕末期の助郷一揆

西濱 広亮

## 序

江戸時代の初めに公的な荷物の継ぎ送りをするため、幕府により伝馬制が定められた。宿駅常備の人馬では正常業務を行いきれない場合に宿役人方より呼び出され、補助を行った村々が助郷村である。また宿と助郷は藩領・幕領に関係なく道中奉行の管轄下に置かれ、役負担の条例などが定められた。宿駅の負担の増加が進む中で同時に助郷村も負担が大きくなり、新たに助郷に指定される村が増えていったが、それらの村々はその割替の時期や形態によって区別され、その負担も違っていた。助郷と宿はほとんどの場合、対立関係にあり、亀山においてそれが表面化したものが、慶応三年（一八六七）二月に起こった亀山宿定助郷十四ヶ村一揆である。

## 一、亀山宿助郷一揆の背景と経過

一揆前年の亀山地域の事情を見ると、七月九日、八月七日に洪水

があり、家や木、橋などが流され、作物も被害を受けている。これが当時の助郷村々を疲弊させたのは言うまでもなく、一揆の背景のひとつとして考えられる。

慶応三年二月五日、定助郷の内の数村に人足の動員がなされ働いていたが、午後三丁四時頃、宿方の人足が割の良い商人の荷物を選ぶなどの不正を行ったために口論となり、才配人（人足の世話や宿との交渉を行う者）が取り押えようとした。しかし押さえきれなくなり、取り押えて貰おうと役所へ向かったが誰もおらず、また大庄屋も居合わせなかった。その間に定助郷の人足達は、阿野田河原へ立ち退き、この日は人足触れが出ていない亀山領内の定助郷の者も集まって、午後五時頃には約五百人が集まったのである。

この一揆は突発的に起こったように見えるが、役所に誰もおらず大庄屋も居合わせなかったというのは話が出来すぎである。また近郷とはいえず、事前に打ち合わせがなければ一

時間で何百人もの人数が集まるとは思えない。以上の事から事前に打ち合わせがなされていたものと推定される。

この騒動に対応して藩は午前二時頃、助郷村の庄屋、肝煎を十人ほど呼び出して河原へ出向いた。しかし一揆勢は収まらず十ヶ条の要求を出し、さらに城下へ上り打ち壊しを行ったのである。その後一揆衆は一揆後の主犯探しや吟味をしないという事を解散条件として出し、それを藩の重役が承諾したことで、一揆は終結を迎えるのである。

## 二、「助郷」村々の対立構造

亀山市歴史博物館所蔵「人百姓拝借金請取券帳」には、一揆前年の五月に亀山領内の「石薬師宿助郷四日市助郷庄野宿代助郷助合村々亀山関両宿助合村々」四十ヶ村が書いた覚書きが収録されている。この史料は助合郷（藩から設定された助郷）、定助郷（昔からの助郷）の負担が平等になる事に反対しつつ、他領へ助郷を指定する事を求めたものである。この覚書きの村々の中には、「石薬師宿助郷」「四日市宿助郷」が含まれているのに対し、亀山宿の定助郷の村々は含まれておらず、亀山における助郷同士の対立関係というものが見出せる。

天保九年（一八三八）に、亀山宿定助郷の村の代役（代助郷）として、鳥羽藩領、西条藩領の九力村が指定されたが、これらの村は、遠距離のため役を銀納することになった。また弘化三年（一八四六）には亀山宿

が困窮のため、新たに十二力村の助郷（増助郷）が指定された。これらの内、鳥羽藩・西条藩・八田藩の村については、亀山宿まで遠距離のために助郷役の代銀納が承諾されている。この二件について、後者の増助郷村に関しては宿からの嘆願であり、宿方への補足としての役であったが、前者の代助郷村々に関しては定助郷村からの嘆願であり、設定の対象が違っているのである。しかしこの時期は何か、代助郷村からの代銀が宿方に回ってしまい、定助郷は代助郷設置による負担軽減の恩恵に与れなくなっていたのである。このように今回の一揆は助郷と宿との対立のみでなく、助郷同士の対立でもあり、この二つの対立が内在していたのである。

にしはま こうすけ  
人文社会科学研究所地域文化論専攻  
日本近世史



人百姓拝借金請取券帳

# 古墳時代後期の亀山・関

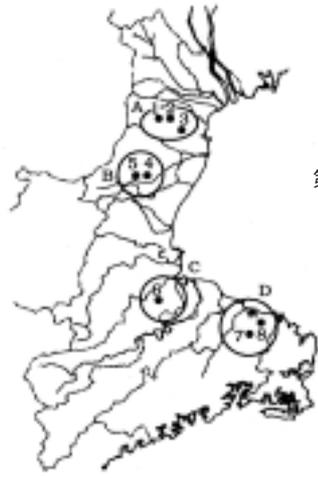
山田 真靖

## はじめに

鈴鹿川流域は伊勢国内において安濃川流域、雲出川流域と並んで多くの古墳が築かれた地域である。畿内から東国へのルート上にあることがその一因である。中でも亀山市が関町と接する山下・太岡寺地区は畿内から伊勢国へ出た場合、最初に開ける平野で、交通の要衝として大きな役割を果たしてきた。

今回は亀山・関（亀山は山下、太岡寺地区を中心とした地区に限る）地域を見ていき、伊勢国内における当該地域の歴史的位置付けを行いたい。

## 一、亀山・関の古墳



第一図 伊勢国における東海系土器と在地区土器の混在古墳の分布

太岡寺古墳群は鈴鹿川の左岸、平野を見下ろすように突き出す丘陵の突端に位置する。五世紀後半から七世紀

初頭までの約百年にわたり六基の古墳が連綿と築かれた。主体部の構成も木棺直葬が二基、横穴式石室が二基確認されている。木棺直葬から横穴式石室への移行は六世紀中頃に行われている。

太岡寺古墳群と鈴鹿川を挟んだ対岸地域には木ノ下古墳、山下古墳などの前方後円墳が築かれている。五世紀後半から六世紀初頭までの時期に連続して築かれ、木ノ下古墳では最終的に六世紀中頃まで追葬が行われている。注目すべき点は太岡寺古墳群、木ノ下古墳、山下古墳はその築かれた年代にあまり差がないにもかかわらず、それぞれが特徴をもつことである。副葬品や構造、古墳が築かれた時期からは多少の共通点が見られても、それら古墳の被葬者に連続した関係を見出すことはできない。

発掘調査が行われた木ノ下古墳は山下古墳とともに、亀山・亀山地域を支配していた有力者の古墳であると考えられる。六世紀中頃になると木ノ下古墳の追葬が終了する。以後、前方後円墳を築く有力者は確認できない。木ノ下古墳における埋葬の終焉と同じ時期に太岡寺古墳群では横穴式石室が導入され、その後、関

台古墳、引地古墳などの横穴式石室が築かれ、亀山・関地域に横穴式石室が定着するようになる。

また太岡寺古墳群の副葬品の中にはいわゆる東海系須恵器と在地区須恵器とが副葬されている可能性がある。

## 二、他地域からの須恵器の搬入古墳

伊勢国内には太岡寺古墳群と同様に東海系須恵器と在地区須恵器が混在して副葬されている例が見られる。その中で、まとまって須恵器が出土する古墳を見ていきたい。

図1で見られるように分布をみると大きく分けて4つのまとまりが確認される。四日市地域(A)には青木川古墳群(1)、和田ヶ平古墳群(2)、東起古墳(3)が見られる。いずれも内部川流域の同一台地に展開しており、六世紀後半から七世紀初頭に築造されている。内部主体はいずれも横穴式石室である。

亀山、関地域(B)には正知浦古墳群(4)、太岡寺古墳群(5)がある。正知浦古墳群は六世紀後半から七世紀前半の古墳である。

松阪地域(C)の浅間五号墳(6)は十二基ある古墳群の一つで、内部主体は木棺直葬である。

伊勢地域(D)には南山古墳(7)、昼河古墳群(8)がある。いずれも横穴式木芯室を内部主体に持つことが特徴的であり、六世紀中頃から七世紀前半までにかけての古墳である。

以上の地域でA地区の青木川古墳群和田ヶ平古墳群、B地区の亀山・関地域

の正知浦古墳群では、横穴式石室の玄室の平面形態が中央のやや膨らむいわゆる胴張り型をとる。北勢地方に多く見られる内部主体であり、共通性が見て取れる。

A・B地区の古墳では、副葬されている在地区須恵器の産地の一つには岸岡山古窯があげられる。岸岡山古窯は六世紀後半から七世紀初頭にかけて操業された窯であり、環伊勢湾地域にもこの窯の須恵器が搬入されている<sup>5)</sup>。関町では太岡寺古墳群のほかにも関台古墳で岸岡山古窯産須恵器が確認できる<sup>6)</sup>。このためA・B地区は一つの文化圏として認識できる。

C・D地区の古墳群は東海系土器と在地区土器とが混在するが、主体部の形態が異なっているため、A・B地区とは異なる文化圏に属すると考える。

## まとめ

亀山、関地域では五世紀後半には様々な古墳の様相が見られたが、六世紀後半以降、北勢地方に多く見られる古墳が築かれ、独自性を失っていく様子が見受けられる。また横穴式石室の導入と前方後円墳の終焉時期があたかも対応するかのように見える。以上の二つのことから、亀山、関地域は六世紀の中頃に降し、それまでの前方後円墳の被葬者による支配体制から、北勢地方一帯に及ぶ一つの支配体制の中に組み込まれていったのではないかと考える。

やまだ まさやす

人文社会科学研究所地域文化論専攻 考古学

特集

龜山市・関町の研究

室町將軍の参宮と

新所での饗応

山内 宏之

はじめに

室町・戦国時代の伊勢国は、北部の十力所人数・北方一揆と呼ばれる集団や関氏、長野氏といった国人領主、北畠氏など大小多くの勢力の入り乱れる地域であった。これら守護以外の諸勢力がなぜ伊勢国で多くの力を持つことができたかについては不明な部分が多いが、それぞれの勢力と幕府との関係が大きな要因になったと考えられる。そこで足利將軍参宮時の道中における將軍への饗応についてその実施場所や実施者に注目することにより、国人領主の成長の契機を明らかにする。

一、室町將軍の参宮について

足利將軍の伊勢神宮参宮が行われるようになるのは足利義満による明德四年(一三九三)のことである。足利將軍のなかで義満、義持、義教は特に数多くの回数の参宮を行っている。將軍の参宮は、『耕運紀行』に「いつも御参詣の時、大名近習已下数千人のかみ

しもの人数のおほさに、みちもさりあへねは」とあるように、数千人という大規模なものであった。

この数千人規模の將軍一行に昼食休憩や宿泊するための施設を準備し、饗応を行うのは、道中の守護、守護代の役割であった。守護は普段は京都にいてるので將軍の参宮に先立って数日前に国元に帰り、饗応の用意をしていたのである。

將軍の参宮に関しては、その行程における宿泊、休憩場所やその饗応者について、義満段階のものがある程度踏襲されるように定められていたようである。宿泊、休憩場所と饗応者について判明しているものをまとめてみると次のようになる。

- 一日目 昼 草津
- 宿 水口
- 京極氏(近江国守護)
- 二日目 昼 坂下?
- 不明(心永一五年)
- 不明(耕運紀行)

- 新所 関・長野・北方一揆等
- 心永一二年
- 花宮三二代記
- 坂下 不明(心永一二年)
- 室町殿伊勢参宮記
- 坂下? 不明(永享五年)
- 伊勢参宮紀行
- 柘原 長野 文正元年
- 親基日記
- 宿 安濃津 伊勢守護
- 三日目 昼 平尾
- 国司(北畠氏)
- 宿 山田 祭主

二、新所での饗応について

將軍の参宮に際して休憩、宿泊を行う場所は二日目の昼以外は固定されていた。そのなかで心永一二年(一四二二)の新所での饗応は特殊な事例である。第一は一人が行う將軍の饗応を関・長野、加太、雲林院、北方一揆といった複数で行った事であり、第二にこの時期の参宮時に多く用いられる坂下ではなく、八月の將軍御台の参宮、九月の將軍の参宮の二回だけ新所で行っている事である。

関、長野、加太、雲林院、北方一揆はそれぞれの支配地域は、北方一揆は

三重、朝明、員弁郡の北伊勢二郡一帯、関・加太は鈴鹿郡、長野・雲林院は安濃郡である。それぞれの地域は、地理的に大きく離れていることから、単純に近隣のものによって饗応が行われたのではない。また、長野、雲林院が当番の場合でも、それ以外の国人も新所に集まって饗応を行っている。このことから、新所での饗応は単に饗応のみが目的であったのではなく、別の目的があったと考えられる。

新所での饗応は、將軍の饗応を行わせることで国人たちに守護の支配権の及ばない領地を与え、当時謀反の噂のあった伊勢守護の世保氏に対抗する勢力にする事を目的としていた。伊勢国の雲出川以南は南北朝期より北畠氏が支配しており、守護の権限の及ばない地域であったため、伊勢における伊勢守護の支配地域は北中勢のみであった。新所に集まった国人の支配地域を除くと伊勢守護の支配地域は海岸周辺に限られることになり、守護の勢力を大いに削減することになった。反対に守護から独立した権限を保証され、幕府との結びつきを強める事となった国人たちは、これを契機に勢力の伸張させていった。特に関氏、長野氏は大きな力をもち、守護の不在期間には代わりに連署で支配を行う程のものであった。

新所での国人たちによる饗応は、守護の世保氏が逐電したことから一時期だけのものではあった。しかし、一度独自の力を手にした国人はそれぞれ成長を遂げ、多くの勢力が存在する伊勢の政治情勢を創り出すこととなった。

やまつち ひろゆき  
人文社会科学研究所地域文化論専攻  
日本中世史

# 三重の歴史と風景

## 関西鉄道・津駅の開業

西川 洋

現在、津駅東口をでると左側に津市最高層ビルの「アスト津」があり、正面にも右側にもビルが建ち並んでいます。しかし、一〇年前の関西鉄道支線津駅の開業当時とは、現在とは全く異なる景色が広がっていました。

三重県内最初の鉄道建設計画は一八八三年（明治一六）五月に四日市の稲葉三右衛門らが、関ヶ原と四日市間を結ぶ鉄道敷設（官営）を上申したことに始まります。この頃、京阪神と敦賀を結ぶ鉄道建設が進行中でしたから、これと連結することにより、日本海側と太平洋側とを繋ぐメリットを訴えたものでしたが、実現しませんでした。翌年四月には、民営の鉄道会社によって四日市と岐阜県垂井間に濃勢鉄道を敷設し、官線の関ヶ原駅と連絡する計画が出願されました。この計画も官営鉄道を建設する可能性があるルートの一つでしたから、許可されませんでした。新橋・神戸間の東海道線は一八八九年（明治二二）七月に開通しました。その名古屋・大阪間の敷設

計画には、関ヶ原・米原を通る北回りと三重県を通る南回り（従来東海道）の二つのルートがありました。南回りには鈴鹿山脈を越える難工事が予想されましたが、北の路線が選ばれました。このため、三重県内には幹線鉄道が全く通らないことになってしまいました。

これを契機に、八八年一月、関西鉄道会社創立委員による四日市・草津間の起業請願が出されました。この計画には三重県・滋賀県両知事の後押しがありました。草津・四日市間だけでなく、桑名・四日市間、河原田・津間の三路線の同時建設が出願されていました。同年三月、四日市に関西鉄道会社が設立され、鉄道建設が始まりました。河原田・津間は沿線地主の理解が得られず、八月には亀山から津まで支線を延ばす計画に変更されました。

四日市・亀山間は八九年一月に開通し、九〇年一月には草津・四日市間が開業しました。一九〇〇年（明治三三）には名古屋

屋・湊町（大阪）間を全通させました。

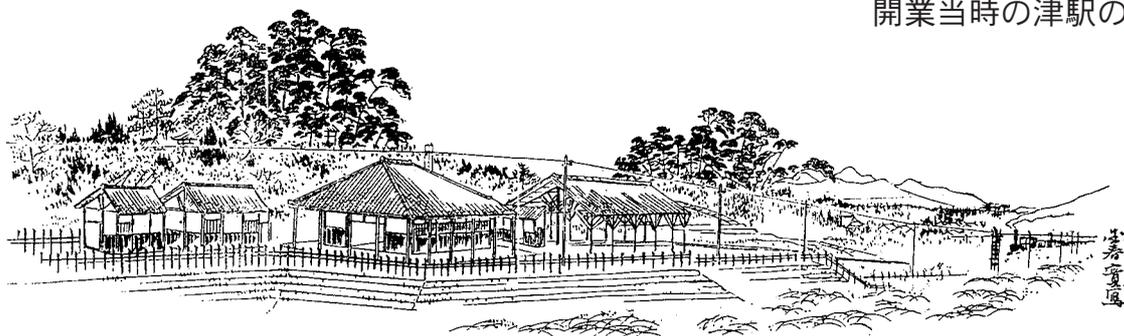
ところで、亀山から津方面へ延びる支線は、九一年八月二日には一身田駅まで、十一月四日には津駅まで開通しました。亀山・津間の所要時間は約四〇分、津・四日市間は一時間三〇分でした。図は開業時の津駅周辺の風景を描いた筆画です。駅舎の背後には密蔵院（現存）があり、遠景に高田本山の屋根が見えます。それ以外には何も無いように見えます。

津駅が設置された所は城下町津の外にあり、八八年の市制実施時に津市に合併されるまでは奄芸郡大部田村でした。駅は津市の中心部ではなく、周辺部に開設された訳です。前記したように河原田・津間の鉄道建設は地主（農民）の協力が得られず中止されました。全国を見ても京都駅を初めとして鉄道駅は市街の中心部ではない所に設置された例が多いのです。初期の鉄道及び駅の建設は必ずしも住民から歓迎されなかったことがわかります。

津駅から更に南に延びる参宮鉄道の建設は、八九年八月宇治山田住民等から出願されました。この鉄道は伊勢参宮客の輸送を狙いに行っていましたので、徒歩による参宮客を宿泊させていた各地の宿屋などは客を奪われるとして鉄道建設に反対しました。現在、新幹線等の誘致合戦が行われていることから見ると隔世の感があります。

にしかわ ひろし  
人文学部教授・日本政治史

開業当時の津駅の図



『伊勢新聞』（明治24年11月3日）より

# 研究室紹介 考古学研究室

## 地域から海外へ～海に見える研究室～

### 服部 英世

三重大学考古学研究室は不夜城と呼ばれている。城内では大学院人文社会科学研究所の院生、人文学部文化学科日本地域の学生総勢一六人余が主に日本考古学を学んでいる。城主は山中章先生である。研究室の活動は、第一に地元三重県での発掘調査である。第二に遺跡確認のための分布調査、各種市町村史のための測量調査、累積する出土資料の調査などである。第三に調査で得た資料の分析・研究が大切な活動になる。その他、調査の一部ではあるが、不定期に他府県での発掘・分布調査や海外での発掘調査を実施している。

最近の発掘調査の成果で興味深いものを二～三紹介すると、まず第一に員弁郡大安町で行った宇賀新田古墳群の調査がある。鈴鹿関に近い伊勢国北部に大和王権との関係を持つ人々がいたことを明らかにした。今から一四〇〇年も昔から伊勢国は大和の勢力下に組み込まれていたのである。今春報告書も無事刊行し、全国に配布した。

海外での第一号調査が中国陝西省商州市で行った東龍山漢墓の調査である。現地の人々と三ヶ月余りの共同生活をしながら発掘を進めた。その成果を生かして卒業論文を書いた学生もいた。現在陝西省の西北大学に留学中である。国内だけではなく世界中に目を向けた調査研究が私たちの自慢である。国際的な交流をもとにした海外での調査をこれからも続けられればと思っている。現在中国側と協議しながら報告書の刊行について計画中である。

城を研究しているわけでもないのに不夜城と呼ばれる所以は、いつも誰かが朝まで「何か」をしているからである。発掘調査は屋外でなければできない。雨や雪が降ればさすがに難しいが（それでも時間が無い時は強行することもある）、夏の暑さにも、冬の寒さにも負けず調査がある時には朝から晩まで地面をなめるようにして掘る。現在のフィールドは一志郡白山町や安濃郡安濃町、多気郡明和町、いなべ市だから、たいてい現地に泊まり込んで発掘する。

掘り出したものを遺物と呼ぶが、ほとんどが粉々に壊れていて、泥まみれである。これを洗浄し、元の形に戻す作業も考古学の大切な調査の一つである。元に戻すといってもそう簡単ではない。言うなれば模様のない無数のジグソーパズルを混ぜ、その一部が失われた状態からパズルを復元するようなものである。根気と注意力を集中させて作業に当たることになる。復元後、土器の作り方や特徴を観察し、その成果を実測図に表す。何とか復元できてもその一部は欠けている。これを推定される形に石膏で戻すのである。復元品に色を塗り、写真を撮り、その成果を報告書にまとめてようやく「調査」が終わる。もちろん現地ではこんな作業は難しい。だから授業の合間や夜に作業するのである。不夜城にならざるを得ないのだ。

城のある場所は共通教育四号棟の五階である。全国から次々と送られてくる報告書、発掘調査で見られた各種遺物、調査で作



中国陝西省 東龍山漢墓での調査風景

成した図面、増え続ける資料が教室からはみ出し、廊下に並び、教室に進出している。五階に上がると全てが考古学研究室であるかのごとき錯覚を覚える。しかし発掘調査はこれだけの人数では足りないもので、まだ専門的授業を受けていない一・二年生や他の研究領域の学生・院生も参加する。特に日本史を学ぶ学生とは一身同体である。総勢三〇名近い学生でこつた返す研究室一帯は随分ぎやかである。

最近、増え続ける資料に対応するため、ようやく遺物整理室を借りることができた。しかしこれも暫定的である。人文学部に考古学研究室ができる前は三重大学歴史学研究会の原始古代史部会が調査を担当しており、そうした先輩方の発掘した資料が小さなプレハブに山積みされている。すばらしい資料がたくさんあるのにお蔵入りの

状態である。何とか大学に資料館ができないものかと働きかけているところである。

ところで研究室に泊まり込み朝方東の窓からはいる朝日を眺めると、「アー伊勢に  
いるんだな」という感動を覚える。朝日にキラキラ輝く伊勢湾、その向こうに赤く映える知多半島、時には伊勢湾の先まで見ることが出来る。そんな朝は充実感で一杯である。

研究室の活動は幅広い。発掘調査というのは市町村にある遺跡抜きには語れないので、地域との連携は欠かせない。当たり前のように市町村教育委員会と連携を図り、交流し、その成果を還元している。現地で発掘調査する時には見学に来る地元の人々はもちろん、小学生や中学生などにも遺跡の様子をわかりやすく話をする。子供たちの中から三重大学に進学しようと思う子が



三重県員弁郡大安町宇賀新田古墳群現地説明会

出ることを密かに楽しみにしている。

分布調査では水田の中、山林の奥、家の周りと歩き回るので、地元の方々の理解は欠かせない。時には話が弾んでお茶を「ごちそうになる時もある。もちろん逆に大声で怒鳴られることもある。いずれも社会勉強だと思っている。

大学の中では毎月第一・三水曜日の夜19時から学生の研究発表会を開催している。もちろん参加は自由である。また、毎年持ち回りで奈良女子大学、京都府立大学と交流会をもっている。今年のテーマは「技術の伝播」で、三重大学は今夏発見された鬼が塩屋遺跡から出土したヒョウタンのような形をしているのでその名のある瓢壺ひょうこの成立と展開をテーマに発表を行った。最後の一週間は何人もが徹夜をして準備した。その努力の甲斐あって、瓢壺という特殊な土器が三重大学も含めた津市北部を中心に生まれ、ここから名古屋や伊賀にもたらされたのだということが判明した。今から一七〇〇年ほど前、この地が文化の発祥地になったことがあったのである。現在の我々もこうした資料を研究して日本の考古学を牽引する力をつけたく思っている。

なお、大学院に進学する学生の全てが考古学のできる研究機関や教育委員会の発掘部局への就職を希望し、多くの先輩方が各地で活躍されている。私も早くそうなりた

いと思っている。

はっとり ひでよ

人文社会科学研究所地域文化論専攻

## 地域に根ざした研究室を めざして

考古学研究室の力だけで発掘調査や研究ができるわけではない。地方自治体関係機関のご協力は言うに及ばず、調査地に住んでおられる地元の方々のご理解なくしては、研究成果をあげることは不可能である。したがって、研究成果を公表し、社会に還元することは、大学研究室に与えられた責務であると考えている。

三重県内を中心に行っている遺跡調査、発掘調査での現地説明会、調査後の報告書の刊行、整理が終了した後の遺物展示や子ども向けの考古学講座への参加などは、先の考えに基づくものである。今後も地域に根ざした研究室活動を活発に行っていくと考えている。

近年では、考古学の調査・研究成果がマスコミによって大きく取り上げられ、脚光を浴びることがしばしばある。華々しい成果は、日常の地道な活動より生まれたもので、その活動は大学研究室のみならず各地方自治体の関係機関でも行われている。当研究室の活動の紹介を通して全国各地で毎日のように続けられている調査・研究に、ご理解いただければ幸いである。

(山中章)

# 三重から世界へ 世界から三重へ

## 日本人とアメリカ人の類似点を求める

『12人の優しい日本人』と『12人の怒れる男』の比較研究

グットマン・ティエリー (Thierry Guthmann)



二つの映画の考察を通じて欧米と日本文化の比較研究を試みたい。アメリカ映画、一九五七年のシドニー・ルメット (Sidney Lumet) 監督の『12人の怒れる男』と、一方そのパロディーである一九九一年の中原俊監督・三谷幸喜脚本の『12人の優しい日本人』である。このエッセーを面白く読むには予め二つの映画を見ておけば良いのだが、逆に言えば限られた行数でこれら両映画を見たい気分をさせるのが、私のもう一つの目的でもある。

さて、二つの映画の対照的な題名から考えると日本人とアメリカ人の態度の差が本研究の焦点になると思われるかもしれない。しかしそうではなく、逆説的な観点から、二つの映画における類似点に

照明を当ててみたいと思つ

両映画の設定は、ほぼ同じである。つまり、どちらの映画でも12人の陪審員が殺人事件の容疑者の有罪が無罪かについて話し合っている。細かい内容をここではお話できないが、アメリカ映画ではある老人が殺され第一容疑者はその息子だ。日本映画では中年の男性が殺され容疑者は被害者の別れた前妻だ。どちらも状況証拠から判断すると、容疑者は限りなく黒に近い。アメリカ映画では最初12人の陪審員の内11人が容疑者を有罪と判断した。つまり死刑判決を選択した。これに対し、日本人陪審員は12人の内11人が容疑者を無罪にした。要するに両映画の出発点は正反対である。日本人は優しくて(悪く言えば甘い)、なかなか人を有罪にすることができない国民であり、アメリカ人は他人に厳しく容疑者をほとんど迷わずに電気椅子に送る国民である。日本とアメリカの陪審員の間に見られるこの対照的な差が日本映画の題名の元になつていると思われる。

その後、アメリカ映画に出ている人物達と対照をなす二人の典型的な日本の叔父さんと叔母さんが日本映画には登場する。彼らは全く理屈に欠けた論拠に基づき自分の判断を説明しようとする。「**「**として被告を無罪だと思つのですか**」**と聞かれた叔父さんが、「**フィーリングかなあ**」と答える場面などは、笑っただけではなく、日本人とアメリカ人は根本的に違つと思つてしまいかねない。しかし、ここで重要なポイント二つを指摘してお

きたい。

一つは、日本人を描くことが中原監督の目的であった。つまり、中原監督の映画は一種の「日本人論」である。必然的に、アメリカ映画に出て来る人物と日本人との差を強調する傾向が出て来る。ちなみに、もう一つの映画は「アメリカ人論」だと言えるのだろうか? そうでもない。一般国民に陪審制度について、また死刑判決の深刻さについて考えさせることが監督の重要な狙いだったのではなからうか。様々な人間の人格が描写されているので、「アメリカ人論」としてその映画を受け止めることも可能だが、監督に「アメリカ人論」を作る意図があつたとは思えない。

次に、中原監督の映画はコメディ、むしろ風刺である。アメリカ人とその差を描くことで人を笑わせようとしているのであるから、その描写が大きなものになるのは当然である。つまり登場人物の日本人的態度は強調されている。どんな映画の場合でも言えることだが、特にこの映画の場合は描かれている内容と現実の間に大きな程度の差が見られる。

映画の中で取り上げられているアメリカ人と日本人の態度の差は実際に存在しているからこそ笑つてしまうのだが、日本映画の風刺コメディ的な性質を忘れると日本人に対して歪んだイメージを持つてしまう虞がある。そうならないよう、以降、両映画の人物の類似点に注目して行きたいと思つ

まず、社会の利益を考えようと思つない



「12人の優しい日本人」の場面

するために動き出した人物である（最初彼は議論にそれほど関心を見せていなかった）。では、日本人陪審員の中で本当の英雄は一体誰だろうか。実は映画の頭で理屈に欠けた論拠によつて自分の判断を説明しようとしていた叔父さんだと私は思っ

わがままな態度をとっている人物が両映画共に登場する。具体的に言えば、一人のアメリカ人は野球の試合を見逃したくない、それに対して一人の日本人は仕事に忙しく、早く陪審を終わらせたいという態度をとる。つまり、日本社会の場合でもアメリカ社会の場合でも公益に対する関心のない人間がいるということに気付く。次に、二つの映画における英雄的な存在について考えたい。

アメリカ映画では、全員の意見に流されずに、最初から全員に一人で抵抗し、勇気を見せている登場人物が間違いなく映画の英雄である（名俳優のヘンリー・フォンダ「Henry Fonda」が演じている）。意志の強さに加え、格好も良く、考えも鋭く、頭の回転も早い。格好や頭の良さという視点から見れば、日本映画にも、それに当てはまる人物が一人いる（豊川悦司が演じている人物）。しかし、その人物はアメリカ映画の英雄のように最初から他の陪審員に抵抗していたわけではない。途中から映画の本当の英雄を応援

しかし、その理由を紹介する前に日本映画の話しの展開を少し説明しなければならぬ。徐々に、陪審員の票決の分配は正反対の状態になって来た。つまり、無罪だと思っている陪審員は一人しか残っていない。それはもちろん例の叔父さんだ。11人の陪審員は被告に執行猶予付きの有罪判決を下すつもりでいる。だが、その叔父さんは皆の圧力に屈せず無罪という自分の立場にしがみついている。彼は一見典型的な優しい日本人の叔父さんであるにも関わらず、集団の意見に流されてはいない。その叔父さんは、確かにアメリカ映画の英雄と比べて、頭が回転し始めるまでにかなり時間がかかったが、勇気の点に関してアメリカ映画の英雄に劣らない。

そして、その叔父さんは頭が一旦動き始めれば天才的な発想を持つようになる。少し種明かしになってしまつたが、元の主人に頼まれて飲物を買つた被告は「死んじゃえ！」と叫んだのではなく、実は「ジンジャーエール！」と叫んだだけであるという発想だ。また、映画の頭では自分の立場を裏付けるために合理的な論拠を一つも言えなかったその叔父さんは、映画の終わりには正反対の態度を見せ、被害者の心理状態を見事な理屈で他の陪審員に説明する。

その叔父さんの存在によつて、「日本人は感情的であり、アメリカ人は合理的である」という決まり文句が極端なものであるということに気付かされる。確かに程度の差は存在しているのだが、普段思われているほどその差は大きくない。

日本とアメリカ映画における陪審員の最終判断の場面を比較分析すれば、この点は更に明らかになると思ふ。



「12人の怒れる男」の場面

アメリカ映画でも被告を有罪にしたがる陪審員は、最近、自分の息子と大げんかし、息子が家出してしまった。他方、日本映画の場合は、どうしても容疑者を有罪にしたがる若い陪審員は、最近、奥さんに捨てられた。そして映画の最後の場面では彼らは、実は、無意識に被告にそれぞれ自分の息子あるいは元妻を重ねて裁いていたことが分かる。要するに彼らの陪審員としての判断は、個人的感情に流された時点で決まってしまった。それで降彼らは相手を説得するために、また自分自身を説得するために、自らの立場を客観的な論拠で裏付けようとして行く。

アメリカ人であれ、日本人であれ、多くの場合、人間の行動の根本にあるのは、理性ではなく、感情だというのは両映画に共通する教訓なのではないだろうか。

グットマン・ティエリー  
(Thierry Gutmann)  
人文学部助教授・比較文化論

コラム

# 地域って頼りになるの？

麻野 雅子

地域って、何だろ？6年前に男の子を出産したことがきっかけで、三重県の子育て支援事業に関わらせてもらったとき、「地域による子育て」という言葉に出会い、「えー、地域が子育てしてくれるの？」「地域って誰のこと？」「地域が子どもを預かってくれるの？」とびっくりしたことがあります。乳飲み子を抱え、新しい経験の連続にとまどい、とりあえず一番確実な実母に助けてもらいながら、「地域による子育て」って、どういうことなのだろうと考えはじめました。

それから数年……。子どもを通じて、多くの地域の方々と知り合いになることができました。子育てサークルや地域のイベントで出会う子育て奮闘中の皆さん、そうしたサークルやイベントの運営に力を貸してくださる諸先輩方、子どもの育ち、あるいは親の育ちを応援してくださるNPOの皆さん……。地域というのは、こうした人たちのネットワークのことをいうのかもしれない。「地域による子育て」というスローガンも、あなたが予算のない行政の言い訳ではないのだと、(それなりに)納得するにいたりました。

子どもにより地域へと導かれた私は、「地域ってやっぱり大事なんじゃない」「地域って、これからの少子高齢化社会にとって、頼りがいのあるものになってもらわないとこまるんじゃないの」と思いは膨らんでいきました。

その思いは、新居を購入されたことで地域に目覚められた樹神成さん(社会科学部教授・行政学)に通じ、三重大学人文学部

20周年記念行事『地域力の向上をめざす市民のネットワークづくり』の違いを認め合う市民たちの絆』という企画へと結実しました。これは、新旧いろいろなやり方で、地域づくりに活躍されている方々を、不感や無関心ではなく、信頼により、つなげていこう、そのための場をつくっていこう、という企画です。

まず、この企画自体、地域に開かれたものにした、ということから、企画の立案の段階から、三重県庁健康福祉部地域福祉チームの森西宏巳さんに仲間になっていただき、同生活部NPOチームの出丸朝代さん、NPO法人在宅支援サービスクラスの理事長である沼田康弘さん、久居市子育て支援ネットワークNPOなどの代表理事である佐橋俊美さんなど、いろいろな立場の方々とともに、「地域って何だ」から始まって、具体的にどうイベントをするのか、まで、意見を出し合いながら、企画を練り上げていきました。

「地域についてなら何時間でも話れる」強力な仲間を得て、平成15年11月8日、アスト津3階イベント情報コーナーにて、『地域力の向上をめざすネットワークづくり』というイベントを開催することができました。内容は、現在小地域(町内会程度)での新たな助け合いのしくみづくりに取り組んでおられるNPO法人在宅支援サービスクラスの沼田さんに、地域再生に向けての夢と課題について語っていただくことからはじめ、NPOどこの佐橋さんらからコメントをいただいたうえで、7、8名のグループに分かれて、「地域って何なの?」どん



な地域が望ましいの?」今地域に何が必要なの?」とつすれば頼りがいのある地域を作れるの?といったテーマで討議しました。老若男女、いろいろな立場の方々、30数名にお集まりいただくことができ、各グループからの報告も、個性豊かで、盛り上がりました。

この成功に気をよくして、樹神さん、森西さんらとともに、今後も、三重県内のいろいろな地域を訪れ、地域のあり方を具体的に調査研究していこうと、はりきっています。「頼れる地域づくりへ!」そして頼れる三重大学人文学部づくりへ!」地域の皆さん!一緒に考えていただけたら、最高です。

あさのまさこ

人文学部助教授・政治思想史





書評

黒川みどり  
『地域史のなかの  
部落問題』  
尾西 康充

同和地区の経済的な低位性と劣悪な生活環境を早急に改善するために制定された特別措置法は二〇〇一年度末に失効した。一九六九年以来三三三年間、三度にわたって制定された特別措置法（同対法、地対法、地対財特法）に基づいて、特別対策として同和对策事業は推進されてきたが、同法失効後は、一般対策の中に組み込まれることになった。

で、運動の指導者からも看過された声なき人びとを、歴史の主体として浮上させることができる。この方法を探ることによって支配の構造がより明確になり、声を奪われてきた者たちの連帯の可能性が生み出されるのである。

『地域史のなかの部落問題』は、右のような新しい方法を意識して著述された一書である。著者の黒川みどり氏には、三重県の水平運動史を扱った研究業績として、『論集・近代部落問題』『米騒動と被差別部落』『異化と同化の間』等の著書、『三重県近代部落史年表』（一）（八）等の論文がある。斯界第一人者といつてよい著者の研究視点は、「たんに運動と政策の対抗関係を論じるのではなく、できるかぎり地域の被差別部落の人々の実態や部落問

題のありようから、それらをとらえ返すように努めたい」（はじめに）という一文に集約されているように思う。

よく知られているように戦前の三重県は全国でも屈指の解放運動の激戦地であった。松阪の被差別部落出身のメンバーが運動をリードし、ボルシェビキの階級闘争第一主義に基づいて闘争を過激に導くことが多かった。共産主義と社民主義とが分岐対立した時代には、県連本部として、労働組合は全協、農民組合は全農全会派、水平社は全水解放派と、どれも日本共産党の影響を受けた陣営に属していた。

だが当時の資料をよく読めば分かるのだが、彼らが三重の解放運動の全てを代表していた訳ではない。小作人のなかには差別意識のために彼らと共に行動をすることを拒否し、同じ農民組合に入らなかつた者がいる。また県連の意向を受け入れず全水解放派に属さなかつた水平社支部もある。黒川氏によれば「戦闘的な運動が存在した地域はごく一部にすぎない」のであり、それら細かな差異に注意を払えば地域の「単線的ではない」歴史が記述できるという。

通説の相対化という点では、府県融和団体を統制する政府の推進力となつた中央融和事業協会を、従来のように上からの押付けとして否定的に見るのではなく、黒川氏はそれが実際にどのような影響を住民に与えたかを注視する。度重なる弾圧を通じて共産主義運動が逼塞し、それに代わって融和運動

が急速に広がっていったプロセスを、地域の実態に即して叙述しその影響を詳らかにしている。

また水平社運動の草分けであり、戦後も部落解放全国委員会書記長として全国的に名を馳せた上田晋市について黒川氏は「徹心同志会を立ち上げて以来、地域に根ざし、部落差別への憤りを原点に運動を進めてきた」と評価する。一九三三年の三・一三事件で検挙された後、彼が思想転向したことを『純水平運動』に回帰して、地域の生活改善などに積極的に関わろうとしていた」と見る。左右に揺れ続けたために今でも毀誉褒貶定まらない上田を地域の視点からとらえ返したとき、思想の純粋性だけでは評価し切れない、苦難に満ちた解放運動の道程が明らかになるのである。

本書には他にも重要な論点が表示されており、どれも傾聴すべきものばかりである。水平運動史研究の新たな方法を提示された黒川氏の業績に敬意を払いたい。

部落解放・人権研究所 二〇〇三年三月

おにし やすみつ  
人文学部助教授・日本近代文学

## 雑 感

人文学部助教授・国際組織法 洪 恵子



ヒマラヤユキノシタ

「この世に天使は存在するのか」こんな奇妙な仮説が米国CNNのトークショーで議論されていた。8ヶ月間の留学生生活を終えて帰国する直前のことである。ゲストは霊媒師・プロテスタントの牧師・カトリックの司祭というメンバー。全員、「天使は存在する」という意見の持ち主で、天使の実例(?)を熱心に語っていた。それによると、どうやら天使の見分け方は、背中の羽や頭上の輪ではなくて、その働きにあるらしい。聞きながら、ある友人から聞いた不思議な話を思い出した。十数年前、彼女が米国を旅行している最中のことである。ニューヨーク・ペンステーションからモンリオールへ行くつもりで乗ったエムトラック(長距離列車)だったが、途中で間違いだと知った。困った彼女を見て、近くに座っていたご夫妻が「今日はうちに泊まって、明日、出直したら」と親切に誘ってくれたので、受け入れてフィラデルフィアに一泊、のみならず「せっかくだから観光もしていったら」ということで、さらに一泊したとのこと。その後、御礼の手紙を書き、さらに1年後、再度やりとりをしようとしたところ、手紙が宛名不在で戻ってきてしまった。不審に思って調べてみたところ、その親切なご夫妻は一年の間に次々にこの世を去ってしまったとのことだった。私自身、20年前、高校生の時に米国に留学していたとき、スクールバスに乗り遅れたことがあった。仕方なくとぼとぼ家に戻ろうとしていた私に「乗り遅れたんだね、高校へ行くのでしょ?送ってあげるよ」と親切に車の中から声をかけてくれた紳士がいた。ご近所の方ということで、「うちも以前、交換留学生をホストしたのだ」とか仰って、話が弾んだ。でも、よく考えてみると、近所のはずなのにその時以外は二度と会うことはなかった。ちなみにホスト・マザーは「お願いだから、二度と知らない人の車に乗らないで」と言っていた。私もいつもはかなり慎重な方である。しかしその時はなぜか言われるままになってしまった。

旅をしていると、時々、思いもかけない親切に出会うことがある。特に外国の場合、それがその国に対する印象を決定づけたりもする。これまで多くの旅をしてきたが、辛い、ひどい嫌がらせには会ったことがない。天使は悪魔より多いのだ。外国への旅だけではなく、人生という旅においても、こう信じ続けられたらよいのだけれど。

(こう けいこ)

## 編集後記

法人化直前で多忙極まる中、本誌が完成を迎えられた現在の心境は、喜びというよりも安堵と表現したほうが適切だと思えます。

本号は当初、財政的事情等で前号までと同様の体裁での発行が危ぶまれていました。夏過ぎによりやく学部長裁量経費が交付されることで確定し、発行の目的が立ったという経緯を辿りました。財政的基盤の確保に先立って具体的な執筆依頼を行わねばならないという特殊な状況は非常に辛いものでした。

そもそも本誌の基本的性格は、「地域交流誌」というものです。これからの三重大学はいかに地域と関わっていくかという重要な課題を抱えています。人文社会科学研究科は四年前からこうした冊子を発行してきており、非常に重要なことだと思えます。したがって、本誌の存在意義を考えた場合、教官の研究分野による差はあるものの、研究科を挙げて今後も取り組んでいかなければならないと感じています。

最後に、執筆者の方々、「三重の文化と社会」担当の先生など多くの方のご協力により何とか完成することができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

編集委員会を代表して

野崎 哲哉

三重大学大学院人文社会科学部 地域交流誌

## TRIO ー三重の文化・社会・自然ー

第五号 ©2004

発行日 2004年3月24日  
編集兼発行者 渡邊悌爾・野崎哲哉・山田雄司・櫻谷勝美・藤田伸也  
発行所 三重大学大学院人文社会科学部  
〒514-8507 三重県津市上浜町1515  
Tel: (059)231-9195 (庶務係)  
Fax: (059)231-9198  
URL: <http://www.human.mie-u.ac.jp/>  
e-mail: [dean@human.mie-u.ac.jp](mailto:dean@human.mie-u.ac.jp)  
表紙: 北出正之 裏表紙及び雑感: 服部範子  
株式会社アイブレン  
〒516-0017 三重県伊勢市神久3-5-67

写真  
印刷・製本